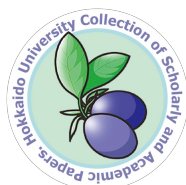


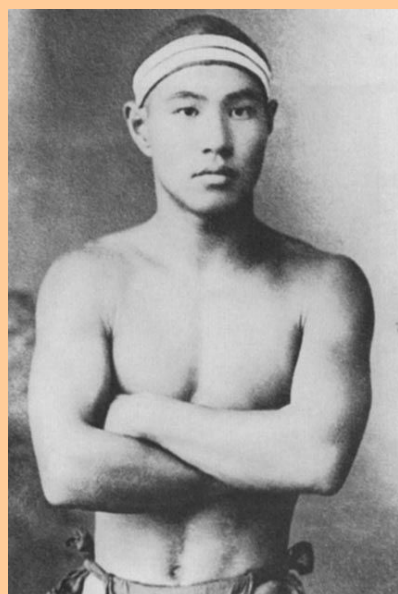


HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	内田正練とその時代 : 日本にクロールがもたらされた頃
Author(s)	三浦, 裕行
Relation	北海道大学総合博物館第20回企画展示「内田正練とその時代—日本にクロールがもたらされた頃—」. 平成17年4月5日～平成17年6月5日. 北海道大学総合博物館
Issue Date	2005-03-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/59691
Type	book
File Information	UchidaMasayoshi.pdf



内田正練



とその時代

日本にクロールがもたらされた頃

2005年4月
北海道大学総合博物館

内田正練とその時代

－日本にクロールがもたらされた頃－



内田正練氏(昭和 16 年頃)

2005 年 4 月

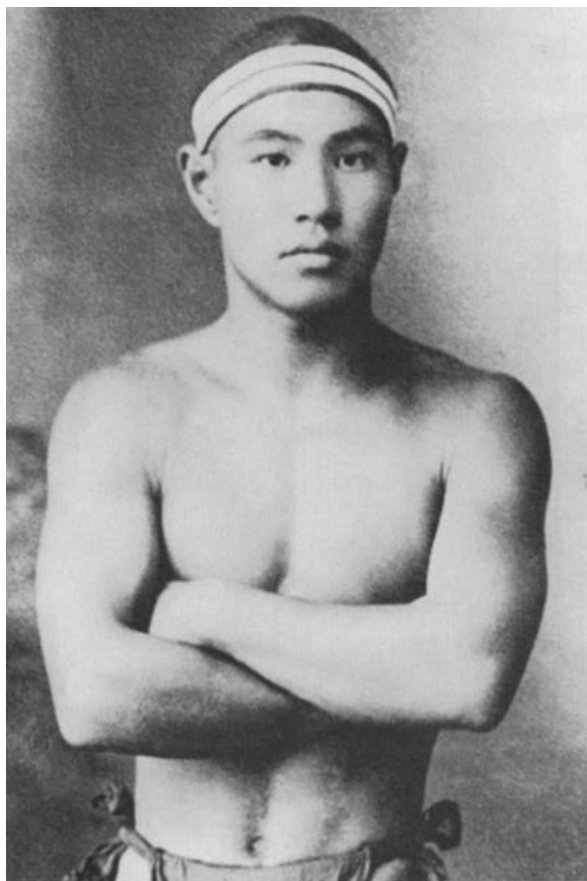
北海道大学総合博物館

企画展示

はじめに

内田正練(うちだまさよし)氏は北海道大学水泳部の大先輩です。大正9年(1920)のベルギーアントワープ大会に参加した**日本最初のオリンピック水泳代表選手**であり、彼の地でクロール泳法を会得して帰国し、広くクロール泳法を日本に広めた日本近代水泳の功労者であります。しかしながらこれまで彼の功績はほとんど世に知られていませんでした。今回内田正練氏の業績を再確認しようと過去の記録をまとめ北海道大学総合博物館第20回企画展示を計画しました。本書はそのパンフレットとして作成したもので、当時の競技記録と写真をもとに日本泳法からクロール泳法へと転換していった大正末期の水泳事情と内田正練氏の足跡を辿ろうとするものです。

内田正練氏は明治31年(1898)1月7日浜松にて5人兄弟の次男として誕生しました。生家は浜松の名家で父は地元の産業を、母は女医として浜松駅前にて産科婦人科の病院を開業する活動家でした。兄内田千尋(東大)が水府流の師範であった影響で内田正練も浜一中に入学後同校水泳部や浜名湾游泳協会で水泳の技を磨き水府流の師範となりました。彼は当時日本最強の泳者で、中等学校水泳大会や極東大会で中長距離の泳者として活躍していました。大正5年(1916)に北大予科に入学後も豊平川や中島公園池の水泳場で水泳の研鑽を続け、大正9年(1920)5月に横浜で行われたオリンピック国内予選で優勝し日本最初のオリンピック水泳競技代表選手に選ばれました。ベルギーアントワープで行われたオリンピック大会の水泳競技では100m自由形と400m自由形に日本泳法で出場し、どちらも予選で敗退しましたが、水泳で世界と戦うにはクロール泳法を会得する事が必須であると認識し、彼の地で近代クロール泳法を会得して帰国しました。当時の日本国内では日本泳法を研鑽すれば世界と戦えると考える人も多くいて、諸手をあげてクロールを受け入れる状況ではありませんでしたが、世界と戦うにはどうしたらよいかと言う観点から内田正練は北海道内において積極的に講習会や水泳大会を主催してその普及に努めました。その結果、大正14年(1925)には極東大会代表選手時任巖を有した函館中学が全国優勝を飾り、その後宮下利三(札幌一中、北大)、松浦武雄(北海中、立大)、根上博(余市中、立大)など極東大会や国際オリンピック大会で活躍した代表選手を輩出しました。北海道大学農学部卒業後は妻子を伴ってアルゼンチンに移住し苦勞をしながらも大規模農園を経営しました。帰国後は同郷の鈴木陸軍大佐の呼びかけに応じビルマ独立義勇軍の将軍として活動し、ラングーン入城を果たしました。その後海軍の司政官としてニューギニアに赴任しましたが、昭和20年(1945)2月14日惜しくも戦死、47歳の生涯を閉じました。今年はその没後60年にあたります。内田正練氏の世界を股にかけたスケール大きな活躍ぶりをみると、彼こそ、**”Be Ambitious”** というクラーク精神を発揮して世界的に活躍した北大生のひとりであったという思いを強くします。



北大予科時代の内田正練(浜松北高水泳部百年史)

もくじ

はじめに	3
第1章 明治時代の競泳事情	6
最初の国際試合	6
第2章 クロール導入	8
クロール以前の外国泳法	8
クロールの誕生	9
極東大会始まる	9
最初のクロール泳者	9
内田正練の活躍始まる	11
内田正練北大予科入学	14
茨木中学におけるクロール泳法研究	18
アントワープオリンピック参加	20
第3章 内田正練のクロール普及活動	26
オリンピック報告会	26
拔手泳者からクロール泳者へ	27
第4章 日本水泳界の躍進	33
大学対抗水泳競技始まる	33
オリンピック大会で入賞	34
日本におけるクロールの普及過程	35
第5章 内田正練その後	38
参考資料	41
文 献	47

第1章 明治時代の競泳事情

最初の国際競技会

明治の中期、日本にクロール泳法が伝わる以前から横浜や神戸に在住の外国人泳者と日本人泳者との間で競泳大会が催されていた。

明治17年(1884)年4月 横浜で日米各1名の選手の対抗戦が行われた。これが我が国初の競泳国際競技であるとされている。横浜本町の糸平主人田中平八とサンフランシスコの生糸商ゼームス・ウオルス是一人ずつの水泳選手を出し合って競泳させた。米国側はトワンテートという水夫、日本側は熊本県人大東一郎で、本牧海岸から沖に停泊していた警報船戒礁丸まで往復させた。距離も時間も不明であるが大東一郎の勝利に帰し莫大な賞金を得たと言う話である(日本水泳史, p117)。

明治31年(1898)8月13日 横浜西波止場外人水泳場において水府流太田派の泳者と横浜の外国人の間で競泳が行われた。種目は100ヤード、440ヤード、880ヤードの3種目で各種目の1位を取った方が勝ちという事で競技を行い溝口兄弟の活躍により2対1で日本が勝った。この競技会には神奈川県知事や各警察署署長、新聞記者をはじめ多くの市民が詰めかけ盛況であった。この時の競技の様子が当時の新聞に良く描かれているので巻末に引用した(参考資料1)。記録をまとめると以下のとおりとなる。

110ヤード

1位 溝口幹知(東京物理学校、26歳) 1分20秒

2位 ゴッダード(英国、20歳)

3位 近藤要次郎(城北尋常中学、17歳)

4位 ウキード(米国、18歳)

440ヤード

1位 溝口幹樹(22歳) 8分12秒
(日本水泳史, p118 では8分20秒)

2位 ヘイワード(米国、22歳)

3位 プール(米国、20歳)

4位 佐藤 忍(錦城生、17歳)

880ヤード

1位 アービン(英国、22歳) 16分45秒

2位 中沢銈丸(麻生中、18歳)

3位 クーン(オーストリア、17歳) (日本水泳史 p118 ではラーン(奥))

4位 古山清一(開城中、17歳)

110ヤードの優勝タイムは引用文中では1分12秒となっているが、水泳日本(p18)によると1分20秒である。順位は水泳指導(p31)による。第1回のオリンピックがこの2年前の1896年にアテネで行われており、ハンガリーのハヨシュは100mを1分22秒2で泳いで優勝している。距離がどの程度正確であったかは定かではないが、溝口幹知の110ヤード(100.6m)1分20秒は当時の世界的水準にあったと言えるであろう。

明治32年(1899)年8月12日 横浜アマチュア・ローイングクラブの申し出で、再度水府流太田派との国際水泳大会が行われ、2対1で再び日本側の勝利となった。試合の様子は当時の大衆雑誌風俗画報で報道され、手に汗握る競技の様子が良く表現されている(日本水泳史, p119 に転載された記事を巻末に引用する:参考資料2)。記録は水泳指導(p31)によると次のとおり。

100ヤード

1位 近藤要次郎 1分1秒5(流水)

2位 ウイード

3位 田中金郎

4位 ドラモンド



第2回大会の写真 (水連四十年史)

第1列中央溝口幹樹、第2列右から2人目岡崎内膳与禎、第3列右から江口喚蔵、後藤武保、清田政人、1人おいて溝口幹知

440ヤード

1位 原田昌吉(15歳) 7分25秒

2位 ゴッダード

3位 ヘーワード

4位 島山精
880ヤード
1位 アービン 1分6秒26
2位 清田政人(15歳) 1分6秒26
溝口、プール両選手は途中棄権(水連四十年史)

明治38年(1905)8月20日 大阪毎日新聞社は第1回海上10マイル大遠泳大会を行った。予選通過の28名が参加して、完泳は7名であった。

1位 杉村陽太郎(東京法科大生) 6時間02分
2位 沢田定吉(所属不明) 6時間28分
3位 金子宗吉(大阪商船社員) 6時間30分
4位 篠田行蔵(京都一中生) 7時間05分
5位 高谷広義(京都一中生) 7時間17分
6位 鈴木和志理(東京工科大学生) 7時間27分
7位 井上主計(志摩商船学生) 8時間29分
記録は水泳指導(p32)による。優勝者杉村陽太郎は終始一重伸で泳ぎ通した。杉村は後年、国際連盟事務局長として活躍した人物である。日本水泳史による記録は上記と若干の差がある。この大会はこの後10年ごとに開催され、第2回大会では内田正練(遠州学友会)が2位、第3回大会では中松四郎(北大)が4位になっている。

明治41年(1908) 国際水泳連盟(FIFA)発足

明治41年(1908) ロンドンオリンピック開催

C・ダニエルスは4ビートのクロールで100mを泳ぎ、1分05秒6で優勝した。

明治41年(1908) 報知新聞社が隅田川の千住大橋―新大橋間長距離競泳大会を開催。腰山金雄(共修会水泳場向井流)が1時間52分で優勝(水泳指導, p32)。

明治44年(1911)8月18日 時事新報社主催速力検定水泳大会が芝浦で行われた。水泳指導(p32)によると競技は芝浦埋め立て地岸と沖に係留してホテルとしていたロセッタ号との間の海面を使ってタイムレースによる競技大会を行った。結果は次のとおり
100ヤード

1位 国友勇夫(早大理工科) 1分18秒2
2位 飯塚隆二(開成中出) 1分19秒8
3位 福原喜一(安房中) 1分20秒4

200ヤード

1位 鶴飼弥三郎(横浜忠泳館) 2分32秒0

2位 平野 豊(成城出) 2分53秒8
3位 萩原誠一郎(忠泳館) 2分59秒0
(水連四十年史)

また日本水泳史(p124)によると関西においては明治末期、河津彦四郎の道場炉園の帝国水友会は神戸KRACの外人水泳団と敏馬沖で盛んに対抗競技を行い、長崎の瓊浦遊泳協会は明治42年(1909)8月、ドイツ東洋艦隊旗艦スチヤンホルスト号および巡洋艦ライプチヒ号乗組6名の選手を相手に十数名の会員が競泳し、百五十間(273m)競泳は一着児玉、3分25秒、三百間(545m)競泳は一着塚原、4分27秒であったとされるが、距離と時間は正確ではないと思われる。

明治44年(1911)8月20日 浜寺で神戸外人団と対抗競泳が行われた。

1マイル ジェームス 1位 30分10秒
河津彦四郎 2位 30分35秒

中田留吉によるとジェームスはトラジオンクロールの泳ぎ手で足は挟み足であった。神戸外国人の中にH・ドナルドというクロールの名手が居て、中田は大正3年ごろ敏馬(みるめ)の神戸外人ボートハウスの水泳場にその泳ぎを習いに通った(水連四十年史)。

以上の如く明治中期から後期には国内の競泳大会や外国人との競泳大会が盛んに行われていた。これらの大会に於いて外国選手のサイドストロークやオーバーアームサイドストローク(水泳日本, 18)に対し日本選手は抜手などの日本泳法で泳ぎ良い成果を上げていた為、初めてクロールがもたらされた時、「恐るるに足らず」という態度になって現れた。しかしひとたびその偉力を理解するや、あっという間にクロールを習得してしまい、内田正練がアントワープオリンピックから近代クロールを持ち帰ってからわずか4年後のパリオリンピックでは複数の選手が入賞するという快挙を成し遂げた。以下の章で近代クロールの普及過程において内田正練の果たした役割について明らかにしよう。この章を終わるに当たり一つ付け加えるならば、この吸収力のすばらしさは根底に日本泳法の伝統があったからと言えるであろう

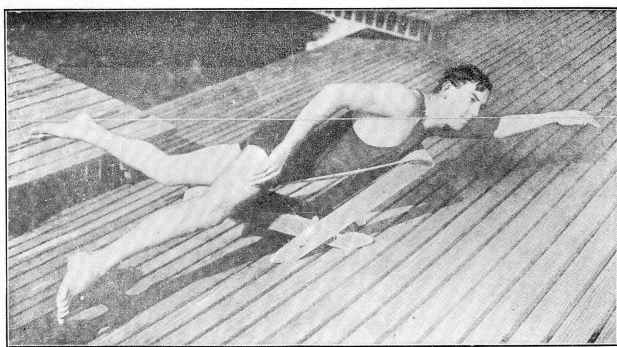
う。さらに注目されるべき事はこれらの競技会に多くの市民が応援、観戦に駆けつけたという事である。水泳競技が市民に人気があったと言う事が近代クロ

ールの普及を容易にし、日本水泳を隆盛に導いたもう一つの要因であると言えるだろう。

第2章 クロール導入

クロール以前の外国泳法

明治30年代に一高(1894)、東京高師(1902)、慶應義塾(1902)、早稲田大学(1905)などに水泳部が創設され水泳大会も種々行われてきたが、泳ぎそのものは日本古来の物であった(水泳日本, p17)。早稲田大学の水泳部はもっぱら日本泳法一点張りで遠泳を

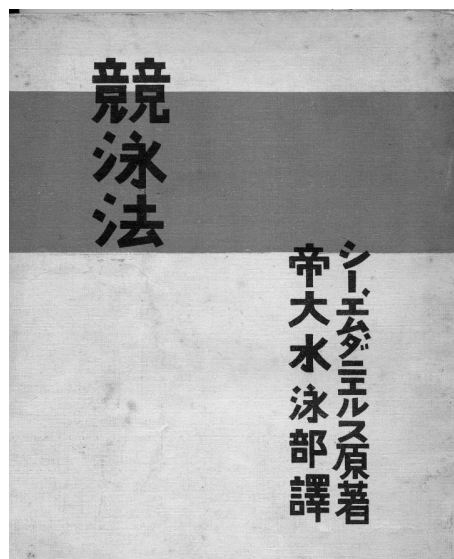


トラジオンのはさみ足の様子(競泳法)

主に行っていて、西洋式の競泳は行われていなかった。当時日本人に知られていた外国泳法はトラジオン・ストロークとオーバーアーム・サイドストロークぐらいであり、クロールは伝わっていなかった(早稲田大学水泳部80年史)。北海道においては明治30年ころから小樽水泳協会主催の水泳講習会が開催されていたが、これも競泳を主眼としたものでは無かった(北大水泳部15周年記念誌, p37)。オーバーアーム・サイドストロークは平泳ぎを傾けて横泳ぎとし、さらに掻いた腕のリカバリーを水上で行うものである。トラジオン・ストロークとはイギリスの水泳指導者トラジオン氏が南アメリカを旅行中現地の人が両手を交互に掻いて泳ぐのを見てこれにはさみ足のキックをつけた泳ぎを考案し、1873年にイギリスに紹介したものである(水泳日本 p12)。京田武男著「最近の水泳術」大正15年(1926)発行、にはトラジオンストロークについて次のような解説

がある。

- (1) 体は水面と約30度の平体、両手を前方に述べ身体から足まで全部伸ばす。
- (2) (右手より抜く事として説く) 左手を水上に持ち上げ肩も上ぐ、其の腕は出来るだけ遙かに左横に伸ばし、右手にて後方に掻き煽る。此時左肩は、下がり腕と共に前に伸ばし込む。
- (3) 左手を伸ばす時に、右を上脚左を下脚とし左右に平らに開き左脚の踵が臀に近づく迄膝を曲げる。次に両足を煽る(左手の伸びる時)
- (4) 此の反動で体が右に傾きたる時、右手は抜けて伸手となり左手で掻き煽る。此の時は左が上脚となり右が下脚となり(3)に述べた通りを行う。
- (5) 呼吸は面部が左右の体の動揺で、自ら上がる時に吸い水中で吐く。
- (6) 手の指尖は下げて水に入れる。



競泳法 (C.M.ダニエルズ著、帝大水泳部訳)

この泳ぎは小拔手と早拔手とを混ぜた様な泳ぎで、脚は蹠足と煽足を混合した形になる。正式な煽足の眞足(しんあし)、受足と言う程規則立つものでな

く又片煽りだけで行くのもある。

明治29年(1896) アテネオリンピックの水泳競技は自由形100m、500m、1500mが行われた。100mの優勝タイムは1分22秒2である。

(水泳日本, p12)

クロールの誕生

明治30年(1897) オーストラリアに移住したフレデリック・キャピールが原住民出身のアレック・ウィッカムの泳ぎ方を見てそれを覚えた。長男のリチャード・キャピールが1902年イギリス本国の競技会に出場し100ヤード(91m)を58秒6で優勝した。次男のシドニー・キャピールは1903年、アメリカのサンフランシスコに招かれ、アメリカにもクロールが紹介された。ここに西欧諸国にクロール泳法が紹介されることとなった(万有大百科事典)。ここで紹介されたクロールは2ビートのクロールであったがその後トラジオンの4ビートのバタ足を加えて4ビートのクロールが出現した。明治41年(1908) ロンドンオリンピックでC・ダニエルズはこの4ビートのクロールで100mを泳ぎ1分5秒6で優勝した。これより先、ハワイ出身のデューク・カハナモクはすでに6ビートのクロールを泳いでいたが、彼の泳ぎはキャピールから伝えられたクロールではなく、ハワイ土着の泳法を洗練させたものであろうと考えられている(水泳日本 p12)。

大正2年(1913)6月 茨木中学に水泳池完成

杉本伝教諭は生徒を指導して学校内に水泳練習用プールを完成させた。プールは逐次改良され、最終的には50mの競泳プールとし、幾多の名選手を生んだ。それまで水泳が盛んだったのは浜名湾、千葉北条海岸、浜寺など地理的条件の整った場所に限られていたが、人工のプールをつくる事によりどこでも水泳が出来る事を示した。

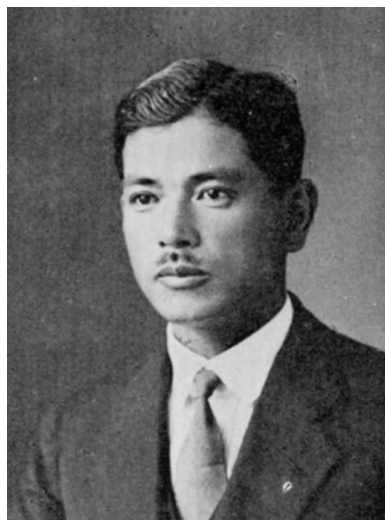
極東大会始まる

大正2年(1913)マニラにて第1回極東大会が行われ

た。日本の参加は第2回大会からである。この大会は当時極東オリンピックとも呼ばれ、フィリピン、中国と競り合う事で日本の競泳が大きく発展した。第1回大会の記録は以下のとおり(水泳日本、p20)。ただし、50ヤードの22秒8は誤記であろう。ちなみに第2回の優勝タイムは32秒4、第3回は26秒6である。

50ヤード	ペニテズ (比)	22秒8
100ヤード	アネレ (比)	1分25秒4
440ヤード	クリストバル (比)	9分32秒6
1マイル	クリストバル (比)	45分51秒8
100ヤード背泳	ペニテズ (比)	1分38秒6
200ヤード平泳	デルパン (比)	4分59秒6

大正2年(1913)8月13日 濱名湾連合游泳大会の模範泳法(水府流太田派)の泳者に内田正練の名がある。種目は一重伸である。また200ヤード競泳では内田正練(15歳)が1位になっている(浜松北高水泳部百年史, p81)。



茨木中学の杉本伝教諭(泳ぎと歩き)

最初のクロール泳者

大正3年(1914)8月10日 大日本体育協会が大森海岸で第1回水上競技大会を開催。正確に記録を取るため一度に泳ぐのは5人以内とし、何度もレースを行った。これが国内最初の本格的な水泳競技大会である。鵜飼弥三郎、萩原誠一郎が活躍し、両者ともクロール泳法で泳いだと新聞記事にある(参考資料3)。鵜飼弥三郎はこの結果大正4年の第2回極東大

会の代表選手に選ばれた(水泳指導, p33)。

1 0 0 m自由形

- 1 位 鵜飼弥三郎(横浜体育研究会) 1 分 0 5 秒 2
- 2 位 萩原誠一郎(横浜体育研究会) 1 分 1 3 秒 6
- 3 位 村松素夫(高師) 1 分 1 4 秒 4

2 0 0 m自由形

- 1 位 萩原誠一郎(横浜体育研究会) 3 分 0 0 秒 8
- 2 位 川中忠治(京都武徳会) 3 分 1 0 秒 2
- 3 位 永井節二(京都武徳会) 3 分 1 3 秒 0

4 0 0 m自由形

- 1 位 玉井音次郎(水術練習所) 6 分 5 1 秒 6
- 2 位 萩原誠一郎(横浜体育研究会) 6 分 5 9 秒 0
- 3 位 西村 節(京都武徳会) 6 分 5 9 秒 6

8 0 0 m自由形

- 1 位 鵜飼弥三郎(横浜体育研究会) 1 2 分 3 9 秒 0
- 2 位 川下彦三郎(修武館) 1 4 分 2 5 秒 2
- 3 位 馬場園義馬(高輪中) 1 5 分 1 5 秒 0

4 0 0 m継

- 1 位 横浜体育研究会(鵜飼、山田、青木、萩原) 5 分 2 1 秒 5
- 2 位 修武館(斎藤、岡村、川下、太田) 5 分 4 1 秒 6
- 3 位 京都武徳会(永井、西村、岩田、川中) 5 分 4 5 秒 0

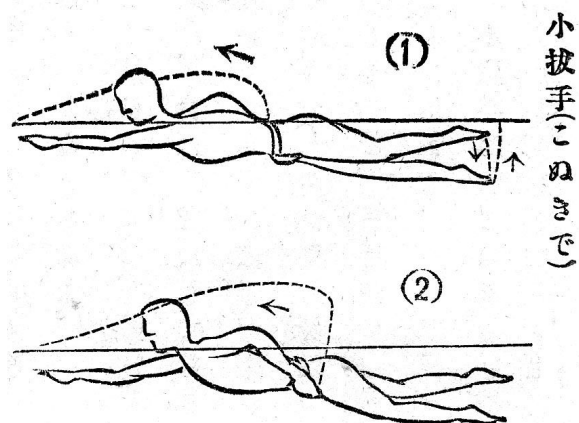
記録は水泳日本(p20)、水連四十年史より

注：鵜飼は次の年の第二回極東大会で1 0 0 ヤード(91.4m)を1 分 9 秒 6 で優勝しているの、上記1 0 0 m 1 分 5 秒 2 には疑問が残る。極東大会の種目は1 0 0 ヤード、2 2 0 ヤード(201.16m)、4 4 0 ヤード(402.32m)であったので、これも1 0 0 mではなく、1 0 0 ヤードであった可能性が高い。なを文中の「百米突」は百メートルの意味である。

鵜飼弥三郎のクロール泳法について高石勝男は次のように述べている「鵜飼弥三郎氏は横濱の人であって、百ヤード競泳の際にはその大半をクロールに似た泳ぎをしたらしく、当時氏の泳ぎをみた人が鵜飼の足はプロペラの様に動くといったというのが、氏がクロールらしいものをはじめた最初の日本人だと思える。氏は横濱外人の水泳場に出入りしている間に、外人がクロールを泳いでいるのを見て、これを取り入れたといふ話である(水泳日本 p20)」。

ただこれにも異説があって水連四十年史では松沢一鶴の説を次のように紹介している。「水府流太田派では、すでに小継ぎ足小拔手、通称バタ足小拔手という泳ぎを持っていたので、鵜飼弥三郎の場合も実はこれであった。彼が外人から習ったと言う話も、上海の極東大会みやげと称するうわさも、クロールというからに

は、バタ臭い外国仕上げではないかと思う日本の舶来尊重思想がなせるわざであった」。新式水泳術(斎藤六衛著、大正2年)によると小拔手は細かく早いバタ足に拔手を組み合わせたものである。現在のクロール泳法と異なるのは顔を水面上に出し正面を向く



小拔手の泳法 (新式水泳術)

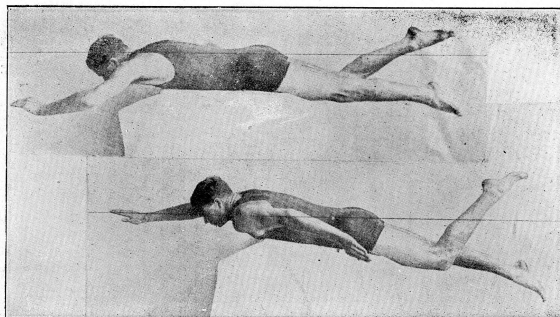
こととローリングを用いないことである。

当時のクロールはどの様なものであったかについては京田武男著「最近の水泳術(大正15年発行)」に次のような解説がある。

- (1) 身体を水面に全く平らに伏せ、面を沈めて、頭と脊を一直線にし、両手を揃えて前に伸ばし、両脚も伸ばして、揃えたる両足尖の間隔を6インチとし、膝は正しく伸ばす。
- (2) 手の使い方は(左右何れを先にするも可) 例えば右手として、(左右同様) 右腕を頭の先横の方へ入ると共に、櫂の如く動かして、右脇下の右に抜く。手は頭を越して前に出すことを禁ずる。片仮名のレの字を緩くした手の軌跡が水中に出来る。手の入れ方は指尖を下にする此の気味でないと前腕が立つ、立つと抵抗を受けるからである。入れた方は十分に強く急に水を押し煽り、抜く前に絶対に力を抜く。従って手は自然に曲がりなりに抜ける。
- (3) 足は膝の曲がらぬように股の付け根から1本の棒のようにし、上から下、下から上へと、水面に直角に蹠(ばた)を踏む(交互に)。蹠足は水面

に出てはならない、又深さは4インチより沈めない。

(4) 手と足との連携は左腕で掻く時に右足を踏み右腕の時に左足を踏み。



ダニエルズによるクロールの実演（競泳法）

(5) 呼吸は各腕四五回の時にする。吐くのは水中で、吸うのは水面で、その時頭は少し左右（何れでも勝手のよき方）に傾けて吸うが敏速を要する。この泳ぎ方は外国でも最近の発達にかかり、速力の大なるものである。日本の蹠足小拔手に相当するが敏活にやると疲労を感じず事頗る大である。速力の速きものであるが足の利かないものには、此の泳ぎは、疲労するだけで速力はない。急いでやる時に、足の如く手が細かに抜けなくなるがそれは当然である。斎藤兼吉氏鵜飼弥三郎氏等は上手である。トラジオンの手を使い、左が伸手(のして)の時右足、右が伸手の時に左足を蹠(ばた)足にするのがオーストラリアン・クロールであると聞いている。

オーストラリアンクロールとは現在で言う2ビートのクロールである。これがアメリカに伝わり、スピードを増すためにビート回数について研究が行われ6ビートのクロールが編み出された。

内田正練の活躍始まる

内田正練は明治31年(1898)1月7日浜松にて5人兄弟の次男として誕生した。生家は浜松の名家で父は地元の産業を、母は女医として浜松駅前にて産科婦人科の病院を開業する活動家であった(北大水泳

部誌, 1993)。兄内田千尋(東大)は水府流太田派五代目師範家元千葉真一(東大医学部学生)から浜名湾(湖)で指導を受け正式な免許を受けた水府流の師範であった。内田正練も浜松一中に入学後同校水泳部や浜名湾游泳協会で水泳の技を磨き次第に頭角を現した(高島平の手記、平(まさる)は正練の姉静枝の三男)。

大正3年(1914)8月9日 大阪毎日新聞社が第1回
中学校連合水泳大会を濱寺で開催。

100m自由形		
1位	白山源三郎(京二中)	1分41秒4
2位	馬場 譲(同志社)	1分44秒4
3位	石山雀爾(同志社)	2分02秒6
200m自由形		
1位	船越重勝(同志社)	5分09秒8
2位	岩田正一(和中)	5分17秒2
3位	勝本得二郎(京一中)	5分47秒0
400m自由形		
1位	内田正練(濱一中)	7分34秒2
2位	安良定治郎(京一中)	8分22秒6
3位	貴志重雄(和中)	8分44秒4
3000m継		
1位	京一中(岩崎六郎、佐藤利博)	66分18秒0
2位	和中(山村武次、島元広次)	72分53秒4
3位	愛知一中(吉川重治、水野義造)	73分41秒0



内田正練氏(静岡新聞、平成6年7月7日)

(浜松北高水泳部百年史(p89)、水連四十年史)
これが現在解っている内田正練(16歳)の最も古い記録である。3000継とは当時良く行われていたレースで、3000mを2人の泳者でリレーするものである。

大正4年(1915)8月22日 濱寺海水浴場開始10周年記念、第2回海上10マイル競泳。参加申し込みが177名もあったので予選を行い20名が本大

会に出場した。第一人者と見られていた鶴飼弥三郎が棄権し、池田が優勝。内田正練が2位となった。この大会には後に北大水泳部員となる中松四郎も参加していた。第3回大会(大正15年)の参加手記が北大水泳部15周年記念誌(p173)にある。10マイルは16kmである。

1位 池田英雄(和歌山中) 5時間10分40秒
2位 内田正練(遠州学友会) 5時間13分13秒
3位 青木忠治(横濱体研) 5時間16分27秒
(水連四十年史, p18)

大正4年(1915) 一高水泳部においてダニエルス著「Speed Swimming」の研究が行われた。この頃シカゴ大水泳コーチの川口氏が一高水泳部においてクロールストロークのデモンストレーションを行ったが、この時はクロールの優位性は理解されなかった。一高生たちは日本泳法を改良強化することで世界の水泳界と戦えると考えていたようで、彼らの結論は関屋悌蔵の手記に次の如く述べられている(泳ぎと歩き, p2)。

- (1) 日本の泳法は世界に類例のない秀れたものであり
- (2) 唯「見せる泳ぎ」芸当のような端行は無意味極まるもので、これが日本泳法を邪道に導く危険性があることに注意し、
- (3) 従って各流派、特に水府流太田派、新伝流の基本体系を深く掘り下げることにより精進し、
- (4) 水上に見える部分より水中の手足を強く有効にする修練を重ね、これに体位とか息合とか間合いかいというものの伝統を取り入れることによって
- (5) 日本泳法を強化するならばやがて世界の競泳界の覇を制することが出来る筈だ。

大正4年(1915) 第2回極東大会(上海)には、初めて日本から鶴飼弥三郎が参加し自由形4種目に優勝した。水泳日本(p20)によると記録は以下のとおり。

50ヤード 1位 鶴飼弥三郎 32秒4
100ヤード 1位 鶴飼弥三郎 1分09秒6
220ヤード 1位 李羅伯(中国) 3分27秒4
440ヤード 1位 鶴飼弥三郎 7分21秒0
1マイル 1位 鶴飼弥三郎 31分59秒4
100ヤード背泳 1位 李羅伯(中国) 1分38秒3

220ヤード平泳 1位 李羅伯(中国) 4分00秒6

大正5年(1916)8月10日 浜名湾游泳協会創設

遠州学友会、浜中、浜松商業、掛川中の4つの水泳部が大同団結して浜名湾游泳協会が作られた。設立に尽力したのは内田千尋(内田正練の兄)、堀江耕造、田畑政治(後の日水連会長)らである。浜名湖游泳協会は多くのオリンピック選手を輩出し茨木中とともに大正・昭和の日本水泳界を先導した。



浜名湾游泳協会の内田千尋氏(前列中央)を囲んで、昭和34年8月14日の初心者講習会(静岡新聞 平成6年7月7日)

大正5年(1916)8月20日

濱寺にて極東大会(関西)予選行われる(浜松北高水泳部百年史, p97)。

大正5年(1916)8月22日 毎日新聞社主催全国

中等学校競泳大会が濱寺で行われた。これを見学した濱中OBの堀江耕造氏の手記によるとこの頃はみな抜手で泳いでいた事がわかる。「(前略)全国と言っても集まった学校は比較的と云うよりも寧ろ非常に少なかった。大阪付近では京都一中、堺中学、和歌山中学、田辺中学、愛知一中、遠くは長崎中学其他三、四校に過ぎなかった。競泳の種類は五十米、百米、二百米、三千米で其三千米は二人で半分宛泳ぐのである。競泳の場所は海岸に栈橋のようなものが出来ていて、それに整列し出発の合図によって一時に飛び込むのである。五十米では和歌山中学の貴志という生徒が著しく早く、他は競泳の体をなさない位であつた。百米、二百米は小拔手略体*と片拔手一重伸の競争であつた。蛙股の平泳もあつたが、これ

は競泳にならなかった。三千米では片拔手一重伸が最優勢で和歌山中学の池田というのが一番早かった。とにかく可なり速いものもあったが、わが濱中水泳部がもし選手を出したならば相当な成績を収め得る自信はある。それから関西地方も近年盛に水府流の稽古をやって居る事がこんな時によくわかる(後略)」(浜松北高水泳部百年史、p97)。(※:原著の表現を変更)

大正5年(1916)9月8日 第3回全国水泳大会が赤羽の日本製麻会社溜池にて行われた。

この大会は極東大会(関東)予選でもあり、内田正練(18歳)は次の成績をのこした(北大水泳部15周年記念誌、水連四十年史、浜松北高水泳部百年史 p97)

50ヤード

1位	斎藤兼吉(東京高師)	28秒0
2位	福原喜一(安房中)	28秒2
3位	鶴飼弥三郎(横浜体育協会)	28秒8

100ヤード

1位	内田正練(浜名湾)	1分02秒0
2位	松村素夫(高師出)	1分07秒2
3位	平野 豊(游泳術)	1分07秒4

220ヤード

1位	内田正練(浜名湾)	2分45秒8
2位	沢田武治(一高)	2分52秒2
3位	鶴飼弥三郎(横浜体育研究会)	2分52秒8

440ヤード

1位	内田正練(浜名湾)	6分10秒4
2位	能重道太郎(安房中)	6分47秒4
3位	加藤正胤(山敷)	6分48秒8

880ヤード

1位	沢田武治(一高)	1分42秒1
2位	鈴木忠蔵(慶大)	1分43秒2
3位	遠藤力雄(東京高師)	1分45秒4

1マイル

1位	内田正練(浜名湾)	27分59秒0
2位	平野 豊(游泳術)	28分42秒0
3位	能重道太郎(安房中)	29分02秒0

100ヤード背泳

1位	三好康和(帝水)	1分38秒4
2位	山本隆一(東京高師)	1分36秒8
3位	三浦武夫(安房中)	1分52秒0

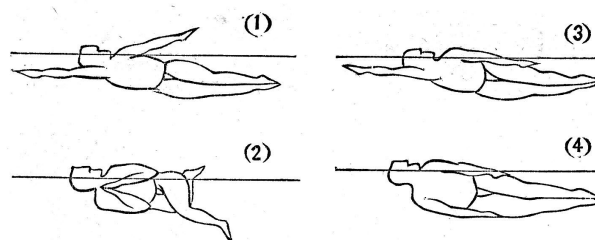
200ヤード平泳

1位	伊藤忠雄(堺中)	3分38秒4
2位	瀬知通太(東京高師)	4分06秒4
3位	石川治雄(通俗)	4分11秒0

200ヤード継

1位	安房中(福原喜一、座間三郎、奥田寛、池谷謹一)	2分05秒8
2位	東京高師(斎藤兼吉、石井儀一、松村素夫、神永勝盛)	2分06秒0

水連四十年史(p19)には内田の活躍について次のように記している。「**浜名湾の内田正練が100から1マイルまで4種目に勝ち、1マイルでは、前年の大阪会場10マイルの優勝者池田英雄をも押さえ、内田は最強の座についた**」。また泳法については「この頃の短距離は大部分は片拔手一重のしを用い、鶴飼、福原などは最後の20メートルぐらいをクロール(バタ足小拔手)に変えるのが通例であった。内田正練は50からマイルまで全部片拔手一重のしであった。沢田武治は神伝流の**小拔手略体***のさき手を終わりまでかききる泳法(トラジオンと同じ)で200を泳いだ。大正6年以降この泳法で200から400、マイルまで泳がれるようになり、大正9年に入谷唯一郎が1500をクロールで泳ぎ通すまで、この泳法は片拔手一重のしと並んで競泳方法の主体



片拔手一重のし(新式水泳術)

をなした。」とされている。(※:原著の表現を変更)

大正5年(1916) 内田正練は山形県庄内中学水泳部の師範として、水府流太田派の泳法を指導した(浜松北高水泳部百年史)。高島平によると内田千尋(正練の兄)は東京帝国大学農科の親友阿部耕治郎の依頼を受け大正3年から4年にかけて庄内中学水泳部の第一師範としてその指導に当たっていた。兄の後を受けて内田正練は大正5年から8年まで指導した。内田千尋が庄内時代に指導した弟子に加藤文治郎がいて、彼は後に北大入学後内田正練の水泳指導の助手として活躍し、大正11年北大水泳部第1期の卒業生として内田正練と共に名を連ねている。

内田正練北大予科入学

大正5年(1916)9月 内田正練は北大予科に入学した。入学当時の状況については予科水泳部の設立に尽力された青葉萬六教授が次の様に述べている。「大正5年7月予科入学試験が済み合格者の発表があった頃、今度予科に有名な河童が入学したとの噂があらちに聞こえた。その本尊はすなわち内田君であり、それは前年上海の極東オリンピック大会に出場して、5種競技に優勝した鷺山正次郎君と併せて水陸両選手を大学に有つという悦びからであった」(北大水泳部15周年記念誌 p10)。青葉教授は浜松出身で浜名湾游泳協会の世話をしたこともある人で内田



青葉萬六予科教授
(北大水泳部15周年記念誌)

正練の北大進学も青葉教授の薦めによるものであった(北大水泳部誌, 1993)。青葉教授は入学後もなにかと内田正練のために活動していた様で、内田が水泳講習会を企画した時も資金調達のた

め新聞社との交渉にあたり、豊平川の東橋からダイビングした時も宣伝するように青葉教授が新聞社に頼んでいる。水泳大会の時は自腹を切って大会会長を引き受けていて、内田の後見人と言っても良い人であった。

大正6年(1917)、第3回極東大会開催

5月8日～12日東京芝浦埋立地で第3回極東選手権大会が開催された。埋め立て地の堀を利用して50ヤードに板で仕切りって競泳を行った。この大会には斎藤兼吉、鵜飼弥三郎、内田正練(19歳)、今村豊、三好康和、鈴木忠蔵らが出場し、日本の圧倒的な勝利に終わった。この大会を茨木中学の杉本伝教諭が見学していて自校のプールはこのような競泳の練習には好適であること、自分たちは日本泳法の伝統と無関係な立場にあるので自由に最適な泳法の研究が出来ることを理解した(泳ぎと歩き p16)。後に



880ヤード優勝の賞状(浜松北高水泳部百年史)

茨木中でコーチをした中田留吉もこの大会の1マイルのレースに片抜手で参加した(泳ぎと歩き p11)。前年の予選後北大予科に入学していた内田正練は3月中旬から約1ヶ月間長崎の福田浦で練習し(水連四十年史)、大会に備えた。この大会の記録は以下のとおりである(北大水泳部15周年誌、水連四十年史、水泳指導 p34)。

50ヤード	1位	斎藤兼吉	26秒4	
	2位	鵜飼弥三郎	27秒6	
	3位	ミガルロン(比)	28秒4	
100ヤード	1位	斎藤兼吉	1分05秒0	
	2位	内田正練	1分05秒2	
	3位	白山源三郎	1分10秒2	
220ヤード	1位	内田正練	2分46秒2	
	2位	池谷謹一	3分01秒6	
	3位	鵜飼弥三郎	3分04秒6	
440ヤード	1位	能重道太郎	6分41秒8	
	2位	加藤正胤	6分54秒0	
	3位	玉井音次郎	6分56秒6	
880ヤード	1位	内田正練	13分42秒6	
	2位	八牧貫一	15分01秒0	
	3位	池田英雄	15分48秒0	
1マイル	1位	今村 豊	29分43秒0	
	2位	能重道太郎	29分57秒0	
	3位	中田留吉	30分03秒0	
100ヤード背泳	1位	三好康和	1分23秒4	
	2位	鈴木忠蔵	1分28秒6	
	3位	李羅白	1分31秒0	
220ヤード平泳	1位	高濱義春	3分29秒0	
	2位	李羅白	3分51秒0	
	3位	松本楯雄	3分56秒4	
200リレー	1位	日本(鵜飼、内田、斎藤、岡村)	1分51秒6	
得点	1: 日本	43	2: フィリピン	3
	3: 中華	3		

この大会で内田と一緒に200ヤードリレーを泳いだ鵜飼弥三郎や岡村治人はクロール泳法であったと

米山弘の手記(水の上を走れ、p127)にあるので当然内田はクロールなるものを知っていたはずである。しかし、20ヤードから50ヤードしか続けられなかったクロールに対し内田や斎藤が片抜手で1位、2位を独占していたので、まだクロールの優位性を理解するには至らなかったことであろう。岡村治人については日本体育叢書水泳(p20)にバタ足小抜手の創始者として次の説明がある。「本田先生門下の俊才岡村治人氏がバタ足小抜手を始められてから殆ど全てが此小抜手になって昔の小抜手は今日知って居る人もない位になった。此バタ足小抜手は此頃流行し出してきたクロールストロークと殆ど同一のものである」。これをバタ足小抜手と呼ぶかクロールと呼ぶかは別にしても、これらの泳ぎはローリングをせず首を突っ込んだまま泳ぐので、呼吸も出来ない事から短い距離しか泳げなかったのである。

大正6年(1917)8月 東京帝国大学創立二十周年記念水泳大会を戸田(へだ)水泳場にて開催(第一回戸田大会)。

50ヤード		
1位	斎藤兼吉(東京高師)	24秒0
2位	座間三郎(安房中)	
100ヤード		
1位	斎藤兼吉(東京高師)	52秒6
2位	内田正練(浜名湾)	
220ヤード		
1位	斎藤兼吉(高師)	2分45秒0
2位	池谷謹一(安房中)	
440ヤード		
1位	内田正練(浜名湾)	6分34秒4
2位	能重道太郎(安房中)	
880ヤード		
1位	内田正練(浜名湾)	12分56秒0
2位	能重道太郎(安房中)	
1マイル		
1位	内田正練(浜名湾)	29分17秒2
2位	能重道太郎(安房中)	
3位	天野真治(浜名湾)	
4位	小野田一雄(浜名湾)	

日本水泳資料集成(年表 p64)、水連四十年史

内田正練(19歳)と斎藤兼吉は二人で一位を独占した。日本水泳史料集成には「爾後大正十一年頃に至るまで重要な地位を占む」とあり、斎藤と内田は当時の日本水泳界の頂点に立っていた。ただし斎藤兼吉の50ヤードと100ヤードの記録は疑問が

ある。100ヤード(91.4m)を単純に100mに換算すると57秒5であり異常に速い。距離の設定にミスがあったか、潮流の影響であろう。

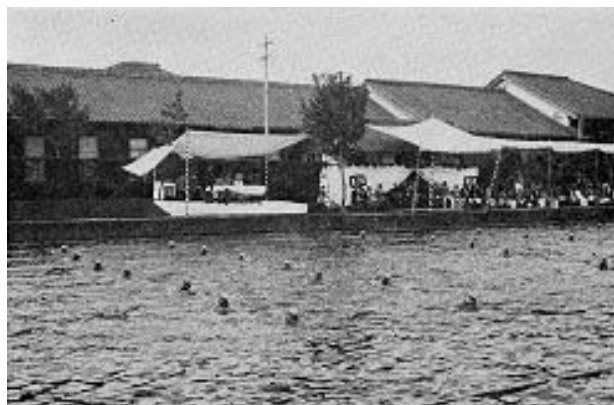
大正6年(1917) 東京神田の東京基督教青年会(YMCA)内に室内温水プール完成。

本田存(ほんだありや:本田存は明治31年の横浜での水泳競技会の日本側委員の一人)が顧問となり、梅沢親光、飯田光太郎、斎藤武五郎、石本己四雄など一高系の大学生が中心になって泳ぎの研究を行った(水泳指導 p35; 水連四十年史 p21)。この室内プールは茨木中学、浜名湾游泳協会と並ぶ水泳研究の一拠点となった。

大正7年(1918) 第二回戸田水泳大会開催

一高水泳部が優勝(日本水泳資料集成年表 p64; 浜松北高百年史 p568; 水連四十年史)。

50m	1位	松沢一鶴(一高)	37秒2
100m	1位	澤田武治(一高)	1分20秒2
200m	1位	澤田武治(一高)	2分42秒0



昭和6年当時の茨木中プール (泳ぎと歩き)

400m	1位	津田正夫(一高)	6分32秒6
800m	1位	津田正夫(一高)	15分23秒0
1マイル	1位	津田正夫(一高)	28分46秒2
リレー	2位	濱名湾	1分54秒2

大正8年(1919) 入谷唯一郎、高石勝男が茨木中学に入学

茨木中学のプールは生徒の労働奉仕で競泳用50mに拡張され競泳用のプールとしての体裁を整え、日本に於ける近代水泳研究の中心地となった。

大正7年(1918)8月31日 第4回全国大会が鳴尾運動場で行われた

50m	1位 斎藤兼吉(高師)	30秒0
	2位 鵜飼弥三郎(磯子)	
100m	1位 斎藤兼吉(高師)	1分09秒0
200m	1位 斎藤兼吉(高師)	2分38秒2
400m	1位 則末芳三(日本游泳術)	5分49秒8
	2位 斎藤兼吉(高師)	
800m	1位 藤田信雄(高師)	13分08秒8
1500m	1位 則末芳三(日本游泳術)	24分58秒4
1000m背	1位 持永義崇(長崎游協)	1分32秒4
2000m平	1位 山本隆一(高師)	3分25秒4
2000継	1位 安房中(福原、座間、佐野、吉田)	2分22秒6
2000継特選	1位 A(斎藤、西村、座間、鵜飼)	2分13秒6
	2位 B(福原、内田、藤田、加藤)	2分14秒8

内田正練は病みリレーに出ただけであった。鵜飼弥三郎はピークを過ぎ振るわなかった。斎藤が50, 100, 200に優勝し、則末が400, 1500に優勝した(水連四十年史)。

大正8年(1919)5月12～17日 マニラで開催された第四回極東大会に内田正練(21歳)参加。日本体育協会が8月開催を主張して極東体育連盟と対立するなどの混乱があり、水泳では内田正練1名のみの参加であったが、内田正練は参加したリレー以外の種目全てに1位となる活躍であった。リレーは陸上選手の助けを借りてエントリーしたが3位であった。記録は以下のとおり(水泳日本, p21)。

50ヤード	1位 内田正練	27秒0
100ヤード	1位 インガ	1分44秒0
	(水連四十年史では2分4秒4)	
440ヤード	1位 内田正練	6分38秒6
1マイル	1位 内田正練	29分36秒0
1000ヤード背	1位 ガッディー	1分21秒2
	(水連四十年史では2分21秒4)	
220ヤード平	1位 フェルナンデス	3分16秒4
1600継	1位 フィリピン	1分30秒4

内田正練の極東大会への参加は北大内でも大きな関心と期待を集めた。青葉萬六予科教授は次の様に述べている。「大正8年マニラにて開催の極東オリンピック大会に内田君の出場を期待して、予科生は同君の為に頗る熱心に練習の便を講じ、同予選前には3月学期試験を了るや直ちに関西へ出張せしめて練習に便せしめた。同君も亦切に技術錬磨に不断の工夫を凝らして寒地練習に恵まれざる欠点を補った。皮膚を絶えず水に慣らすために秋の季節から毎朝冷水摩擦をなし、冬季スキーの練習や柔道の寒稽古をつづけて腿や脚の筋力を緩めないように注意し兼ねて体力を補った。道場では又同君に怪我をさせないように細心の注意が払われた。札幌師範対予科の柔道試合で七名を薙ぎ倒した事は当時同輩の驚嘆したところである。その頃は中島(の池)へ通って練習したもので朝泳いしてから登校する。日曜の早朝中島からの帰りに私の家に寄った事もある。寮へ帰った頃ようやく万年床を離れる寮生も珍しくないなど笑い話も思い出させる」(北大水泳部15周年記念誌 p10)。

大正8年(1919) 帝国水友会主催全国大会(鳴尾)中等学校の部

50m	1位 斎藤巍洋(岸中)	33秒8
100m	1位 鴻沢吾老(北野)	1分23秒4
	2位 入谷唯一郎(茨木中)	
200m	1位 池田研三(和中)	2分55秒4
400m	1位 田中 稔(大阪商)	6分58秒8
800m	1位 小野田幸一(和中)	14分04秒0
1500m	1位 池田研三(和中)	26分23秒4
1000m背泳	1位 永野芳光(育英商)	1分45秒0
2000m平泳	1位 井口義雄(和中)	3分24秒0

大正8年(1919)8月 内田正練(21歳)は豊平川の水面上8mの橋上からダイブを披露して周囲を驚かせた。三島康七(北大水泳部誌昭和55年, p5)によると大正8年8月23日のことである。このときの様子について北大水泳部15周年記念誌の対談の話題になっている。



当時の豊平川の東橋(北大水泳部15周年記念誌)

青葉：内田は跳込みが得意だったが、(飛び込み)臺がないので出来ない。....(中略)。豊平川の東橋でやると言い出した。そのとき跳込みをやってみたけど、水深は9尺(2.7m)あれば大丈夫との事で、7尺(2.1m)は無いと困るが幸いに東橋の下は7尺あるから跳込みをやりたいと云うので新聞社に宣伝をして欲しいと頼んだ。

澤田：鳥人と云って新聞に出て居たサ。塩谷合宿をしていた時ですから大正10年か11年でしよう。

青葉：東橋の時は面白かった。内田の外に2人飛び込む人がいたが上手ではない。内田がどう見えるかと訊くから、君のは空中から滑らかに行くといったら喜んでた。なにしろ内田の入学が大正5年だったから、6年くらいかね。いや何しろ飛び込んだのがアントワープに行ったのよりも前の事サ。

幹事：当時の東京に於けるダイビングの状態は？

青葉：内田は只こんなの(スワローダイブ)がある様な話をして居たよ。

廣田：当時の主として飛沫を上げる程上手という様な日本流の飛び込みだった。浅いところでサ。(中略)

澤田：新聞に高さ5丈(15m)と出て居た。何しろ橋の

山形の桁の上から飛び込んだんですから....。

宮下：今あるのと同じだヨ。30尺(9m)以上あって上がっただけでも恐ろしい様だ。逆立ちも同じようにやった。

廣田：逆立ちが得意でしたネ。

幹事：只飛び込みだけでしたか。

青葉：いや他に何か手を縛って泳いだ様だった。

澤田：達磨何とかという手足を縛って泳ぐ奴サ。

この飛び込みについては長男の内田練太郎氏も父親から豊平川の欄干から飛び込んで有名になったとの話を聞いたそうである。

大正8年(1919)8月16, 17日 第13回関東連合遊泳大会

斎藤兼吉は5種目に優勝した。(記録不明)この年を以てこの大会は終了。

50m自由形 1位 松澤一鶴 32秒

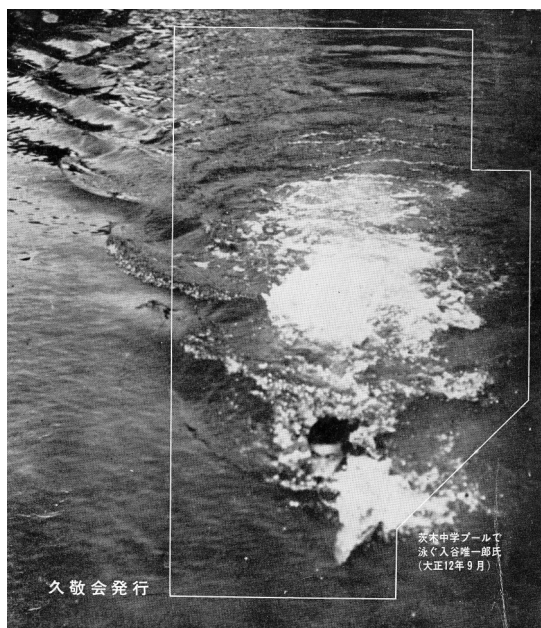
(水泳日本 p21) 松澤氏はバタ足を用いた。

大正8年(1919) 第3回戸田の全国水泳大会おこなわれる

小野田一雄(濱名湾游泳協会)、平野豊(日本游泳専門学校)、則末芳三(同左)ら活躍

50m	1位	小野田一雄(浜名湾)	33秒2
100m	1位	平野 豊(游専)	1分14秒8
200m	1位	平野 豊(游専)	2分54秒8
400m	1位	則末芳三(游専)	6分09秒4
800m	1位	則末芳三(游専)	12分56秒0
1マイル	1位	則末芳三(游専)	25分49秒8
2000継	1位	安房中	2分30秒0
8000継	1位	一高	12分36秒0
1000m背	1位	小野田一雄	1分51秒6
2000m平	1位	平野豊(游専)	3分46秒0
	1位	游泳専門学校	27点
	2位	第一高等学校	16点
	3位	安房中学校	10点
	4位	濱名湾	7点
	5位	桐葉会	3点

(浜松北高百年史, p568 ; 日本水泳資料集成, 年表 p64 ; 水連四十年史, p42)



大正12年の入谷唯一郎氏の泳ぎ（泳ぎと歩き）

茨木中学におけるクロール泳法研究

大正8年(1919)には中田留吉が茨木中へ招かれて水泳の指導を行ったが、中村が指導したのはクロールではなく、拔手であったと高石勝男は述べている（泳ぎと歩き、p11）。クロールを指導したのは茨木中学の杉本伝教諭で、彼は前出ダニエルスの「Speed Swimming」の原著を読み、特に心肺能力の高い生徒を選んで指導した。この年、茨木中1年の入谷唯一郎は中田留吉から70mまではクロールで泳ぎ後の30mは煽足でと指導されたが、そのとおりにすると70mまで先登を切っていても煽足になったとたんに抜かれてしまう。鳴尾の掘り割りで中等学校競泳大会があった日、杉本伝と中田留吉とが相談して百mをクロールで行ってしまえと指示したら、1着で優勝した。これが入谷君中学一年生の夏であった。当時クロールは50m競泳のみに用いる泳法と一般にも解せられていたが入谷唯一郎は100mのみならず、200mでも、1000m、2000mでもクロールなら泳ぎますという自信を持っていた（泳ぎと歩き、p17）。そもそも入谷唯一郎が長距離をクロールで泳ぎ通せるようになったのは校内の10km競争で3位になり心臓が強そうだという理由で水泳

部に編入させられた（泳ぎと歩き、p41）ように、もともと心肺機能が高かった事と、日本泳法の素養が無く最初からクロールを指導された為、日本泳法からの転向者よりもクロールの修得が容易だった為である。なお、水連四十年史の記録によると入谷は100mで2位になっていて、優勝ではない。Yomiuri On-Line 関西に「一九年(1919)の全国中等学校競泳大会では、入谷唯一郎が百メートルをクロールで泳ぎ、二着。実際には一着だったが、片手でタッチした後、もう一方の手で顔をぬぐっている間に後続選手がゴール。両手タッチが必要とのルールを知らなかった。」とあるので、杉本の書くように実際は1位でゴールしたのであろう。

大正9年(1920)8月 第4回戸田全日本競泳大会

前回優勝の一高を破って茨木中学が優勝した。この大会で茨木中学の入谷唯一郎は200mを最初から最後までクロールをもつて泳破して見事一着の栄冠を得、それまで水泳界の元老として知られていた選手を一蹴してしまった。当時は、長距離は片拔手が拔手が主に使用され、クロールは短距離のみに使用されていたのであったが、入谷選手のこの200m泳破はクロールの長距離にも有効なことを初めて一般に認めせしめたのであった。入谷の泳ぎが画期的であったのはそれまでのクロールがローリングをせずノーブレスシングで30～40m泳ぐだけのものであったのに対し、一掻き毎に首を横に振って呼吸をする（ワンストロークワンブレスシング）ことにより、長距離を泳ぎ通せる様になった点にある（水連四十年史 p38）。ただし高石勝男によると「当時のクロールは、従来拔手泳ぎをしていたものが煽足にバタ足を混じた程度のもので、現在の如く連続的なバタ足の連鎖から成り立っておらず、バタ足の中に大きな煽りを交えていた。大正13年頃著された水泳の本には、バタ足に幅の広いキックを入れることは呼吸するためのローリングをする際に役立つものとして必要であると説かれているのを見ても、現在のクロール概念とは相当の距りが看取できる（水泳日本、p22）」とのことである。いっしょに出場していた同じ茨木中学の高石勝男の記述であるので、入谷の

クロールを正確に表していると思われる。長距離をクロールで泳ぎ通せる泳者が出てきたが、足の動きは現在のクロール泳法に見られる連続的なバタ足ではなく、大きな煽り足を伴うものであった。

この時優勝した茨木中の監督、杉本伝教諭の手記に内田正練を生んだ浜名湖游泳協会に関する記述があるので引用しよう。この時茨木中はクロール泳法を用いて優勝するのであるが、当時の内田正練に対する世間の評価がわかるので興味深い。「翌七日すなわち予選の前日になりぬ。また雨なり。浜名湖游泳協会軍来たりて隣室に陣す。同勢八名。小野田、天野を始めとして競泳界の明星を集め得たる遠州一カ国の連合軍。先に**日本随一の名手内田正練氏**を生める同団のことなれば口には出さねど固き自信を胸に秘めて黙々として語らず。彼ら一度練習せば「スワコソ浜名練習せり」と控所に居合わす連中総立ちになって拝見す。充分なる自信を有する者もこのありさまを見ては心安らかならず。なぜ己はこれまで不熱心なりしかと己を省みてその練習の不足を怨む(泳ぎと歩き, p20)。」また、岩手水泳協会については「夕方にいたって岩手水泳協会とて岩手県北上川岸に練習せる連合の団体22, 23歳の人の荒くれ男6名来着。これも早速猛練習。鮮やかなる早拔手、みごとなるクロールに威勢を示しければ、急に恐ろしくなりしもののごとく、中にも高石は目のみ白黒せしめて感心する事久し。」とあり、クロール泳法は全国的に研究されていた事や内田正練の名声はすでに確固たるものになっていた事がわかる。記録は水連四十年史による。

5 0 m			
1 位	野田曹一	(神高商)	3 1 秒 2
2 位	佐野勝太郎	(安房中)	
3 位	小野田一雄	(浜名)	
1 0 0 m			
1 位	小野田一雄	(浜名)	1 分 1 2 秒 4
2 位	入谷唯一郎	(茨木中)	1 位と同タイム
3 位	白山源三郎	(神高商)	
2 0 0 m			
1 位	入谷唯一郎	(茨木中)	2 分 4 9 秒 0
2 位	郷 達夫	(一高)	
3 位	佐野勝太郎	(安房中)	
4 0 0 m			

1 位	郷 達夫	(一高)	6 分 2 7 秒 2
2 位	天野真治	(浜名)	
3 位	佐野勝太郎		
8 0 0 m			
1 位	今村栄三	(慶大)	1 4 分 0 5 秒 0
2 位	天野真治	(浜名)	
3 位	瀬川政雄	(磐手)	
1 5 0 0 m			
1 位	今村 豊	(慶大)	2 7 分 0 5 秒 6
2 位	天野真治	(浜名)	
3 位	松上竜太郎	(茨木中)	
1 0 0 m 背泳			
1 位	石田恒信	(茨木中)	1 分 4 0 秒 6
2 位	藤本達次郎	(一高)	
3 位	小野田一雄	(浜名)	
2 0 0 m 平泳			
1 位	石田恒信	(茨木中)	3 分 3 7 秒 0
2 位	吉田啓吉	(茨木中)	
3 位	畦健太郎	(一高)	
2 0 0 m リレー			
1 位	安房中		2 分 1 8 秒 2
2 位	一高		
3 位	浜名		
4 位	茨木中		
8 0 0 m リレー			
1 位	一高		1 2 分 0 8 秒 8
2 位	安房中		
3 位	茨木中(入谷、高石、石田、吉田)		
得点	茨木中 1 5 点、一高 1 3 点、浜名 1 2 点		

大正 9 年(1920) 8 月 2 8、2 9 日 第 5 回全国大会

5 0 m			
1 位	小野田一雄	(浜名)	3 2 秒 6
2 位	鈴木伝明	(明大)	
3 位	鴻沢吾老	(帝水)	
1 0 0 m			
1 位	小野田一雄	(浜名)	1 分 1 3 秒 8
2 位	入谷唯一郎	(茨木中)	
3 位	平野 豊	(研究会)	
2 0 0 m			
1 位	入谷唯一郎	(茨木中)	2 分 4 8 秒 2
2 位	小野田一雄	(浜名)	
3 位	万里小路通考	(安房中)	
4 0 0 m			
1 位	入谷唯一郎	(茨木)	6 分 2 6 秒 6
2 位	能重道太郎	(安房中)	
3 位	郷 達夫	(東大)	
3 位	万里小路通考	(安房中)	
8 0 0 m			
1 位	能重道太郎	(安房中)	1 3 分 2 9 秒 6
2 位	郷 達夫	(東大)	
3 位	羽根田梅太郎	(鶴岡中出)	
1 5 0 0 m			
1 位	能重道太郎	(安房中)	2 5 分 5 5 秒 0
2 位	和田次衛	(横商)	
3 位	羽根田梅太郎	(鶴岡中出)	
3 位	石毛政信	(横商)	
1 0 0 m 背泳			
1 位	石田恒信	(茨木中)	1 分 3 6 秒 6

2位 木内三次 (高師)
 200m平泳
 1位 平野 豊 (研究会) 3分37秒0
 2位 木内三次 (高師)
 3位 佐藤鎮吉 (高師)
 200mリレー
 1位 一高(沢田武治、和田次衛、津田正夫、松沢一鶴) 2分18秒0
 2位 帝水
 400mリレー
 1位 一高(松沢一鶴、郷達夫、和田次衛、沢田武治) 5分22秒8

50mと100mは小野田一雄、200mと400mは入谷唯一郎、800mと1500mは能重道太郎が勝った。能重はのし泳ぎの名手で、400mで入谷のクロールと能重の片抜手とぶつかり、入谷が勝ったので、クロールの声価はますます高まった(水連四十年史)。

大正9年(1920) 第六回大毎全国中等大会

100m
 1位 入谷唯一郎 (茨木中) 1分12秒2
 2位 斎藤巍洋 (岸中)
 3位 西本竜三 (和中)
 200m
 1位 入谷唯一郎 (茨木中) 2分58秒0
 2位 高石勝男 (茨木中)
 3位 斎藤巍洋 (岸中)
 800m
 1位 吉田圭一郎 (和中) 15分26秒6
 2位 宇治田勝三 (和中)
 3位 寺田 一 (和中)
 100m背泳
 1位 石田恒信 (茨木中) 1分48秒8
 2位 岩橋計夫 (和中)
 3位 板倉 巖 (茨木中)
 3000mリレー
 1位 和中(池田研三、小野田幸一)



生麦の予選会場(水連四十年史)

50分45秒8
 2位 茨木中(松上竜太郎、入谷唯一郎)
 3位 富田(伊藤忠三、伊達宗明)

このように斎藤と内田がオリンピックに参加している間にも、日本に於けるクロールの評価は徐々に高まりつつあったが、内田や斎藤の「抜手」はそれを凌駕していたのも事実である。

アントワープオリンピック参加

大正9年(1920)4月22、23日 日本水泳オリンピック初参加の予選会が横浜市生麦三笠園池に100メートルのストレートコースを6本取って行われた。水温は18度であったが、「雷雨を冒して選手意気大いに昂がる」と当時の新聞に記されている(東京朝日新聞、大正9年4月24日)

50m
 1位 斎藤兼吉 (高師出) 31秒0
 2位 小野田一雄 (拓大) 31秒0
 3位 鈴木伝明 (明大) 32秒8
 100m
 1位 斎藤兼吉 (高師出) 1分12秒4
 2位 内田正練 (北大) 1分17秒4
 3位 平野 豊 (東京) 1分20秒0
 3位 鈴木伝明 (明大) 1分20秒0
 200m
 1位 内田正練 (北大) 2分50秒4
 2位 斎藤兼吉 (高師出) 2分57秒8
 3位 堀安 治 (和歌山) 3分13秒2
 400m
 1位 内田正練 (北大) 6分24秒0
 2位 斎藤兼吉 (高師出) 6分42秒6
 3位 則末芳三 (東京) 6分45秒4
 800m
 1位 則末芳三 (東京) 14分50秒4
 2位 池田研三 (和歌山) 16分40秒4
 3位 岡本幸吉 (和歌山) 17分49秒6
 1500m
 1位 則末芳三 (東京) 29分46秒4
 2位 池田研三 (和歌山) 31分59秒4
 3位 高居辰雄 (東京) 32分19秒0



こりあ丸(右)と同型のさいべりあ丸(左)
「なつかしい日本の汽船」より

こりあ丸は東洋汽船所属の貨客船で横浜－ハワイ－サンフランシスコの太平洋航路に就航していた。定員一等209人、三等313人。総トン数11,810。大正12年年(1923)の関東大震災の時横浜港に停泊中で、破壊された地上設備に代わって震災の第一報を発したことでも有名である。



同型のさいべりあ丸

100m背泳

1位	持永義崇	(長崎)	1分39秒2
2位	枝吉彦三	(農大実)	1分58秒6
3位	帆足夏雄	(長崎)	2分01秒0

記録は50年の歩み(札幌水泳協会, p33)、
水連四十年史, p43

50mと100mに斎藤兼吉、200mと400mに**内田正練**(22歳)、800mと1500mに則末芳三が優勝し、この3名がオリンピック代表に選ばれたが、則末は病のため辞退した(水連四十年史)。選考の過程については当時の新聞は次のように紹介している。「水泳の代表選手、一名は斎藤君一名は内田か則末か、予選滞りなく終わる。水泳の国際選手予選会は二十二、二十三の両日を以て終了し別項の通りの記録を作ったが代表選手の栄冠を戴くは果して誰か。今二十四日陸上競技の第二予選会終了の後水陸同時に約十名内外の選手決定を見る筈で水泳は記



オリンピック予選会参加の選手(水連四十年史)
左から 則末芳三、平野豊、内田正練、斎藤兼吉の各氏。

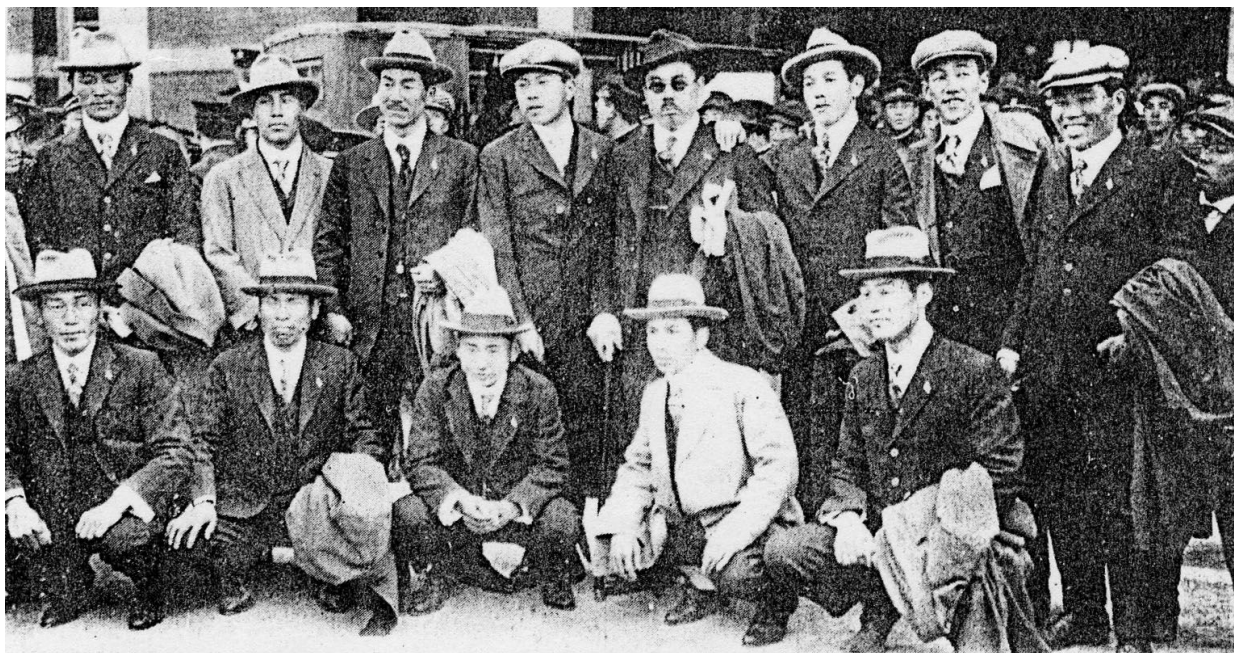
録その他の関係上からも二名派遣される事となるであろう。先ずその一人として高師の斎藤兼吉(さいとうかねきち)君は確定と見て差し支えなく他の一名は北海道大学の内田正練(うちだせいれん)君東京の則末芳三君の中何かに決定されることは疑いない。然し斎藤君は若し陸上競技の五種からでも選抜される事となれば勢い水泳は内田、則末の両君が当然入選し斎藤君は陸上より派遣せられ、そして更に水泳も行るかどうかは国際競技のプログラムの日割に依るので決定することは出来まい。何れにしても斎藤、内田は短中距離、則末は長距離選手として日本の代表選手たる資格は十分だ(後略)。(東京朝日新聞、大正9年4月24日)。内田正練の呼び方であるが当時の新聞でルビが振られているものはすべて「うちだせいれん」となっており当時の水泳界では「せいれん」と呼ばれていたのであろう。北海道大学水泳部でも「うちだせいれん」と呼び伝えられている。

大正9年(1920)5月2日 内田正練は恵迪寮生に見送られて札幌を出発(北大水泳部15周年記念誌)し、5月14日に横浜港発のコリア丸で日本を出発した。彼らは船で太平洋をアメリカに渡り、大陸横断鉄道で大西洋に出て更に船でイギリスに渡り8月3日にアントワープに到着、(水の上を走れ, p125)、8月14日のオリンピック開会式に臨んだ。出発の時の様子およびハワイまでの船中の様子は当時の新聞に記事が載っている。東京駅や横浜埠頭での見送り風景、船上にキャンパスで7.2メートル四方のプールをつくり内田や斎藤はその中で練習した話、ハワイへの

船中相撲大会で活躍した話などリアルに伝えられているので巻末に引用した(参考資料4、5)。

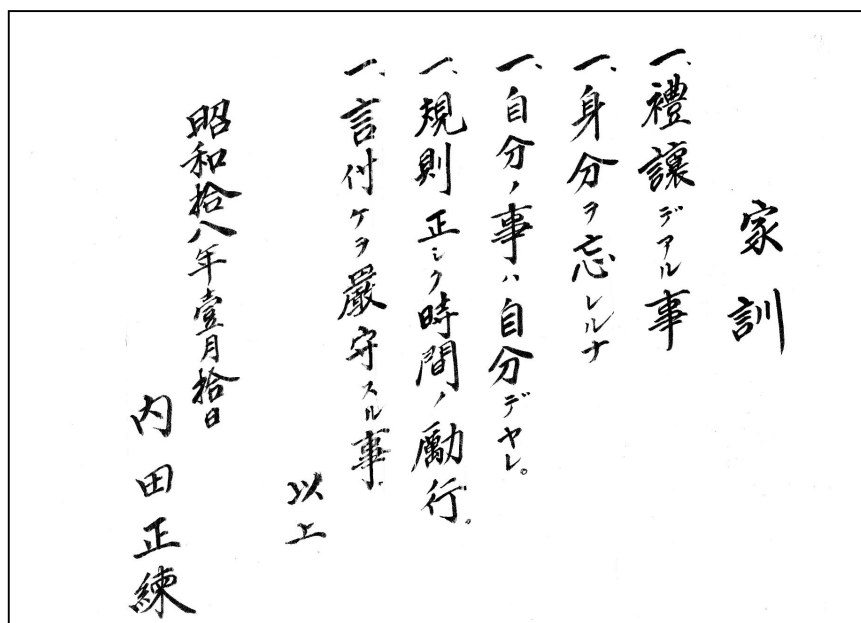


内田正練氏（水泳日本）



第7回オリンピック選手団（運動年鑑大正10年）

後列中央サングラスが監督の辰野保氏、後列向かって左から2番目が内田正練氏、左端が斉藤兼吉氏
後ろに鉄道車両が見えるので駅のホームでの記念写真と思われる。東京朝日新聞には東京駅から横浜
駅まで鉄道で移動したと記されているので、この写真は、大正9年5月14日東京駅で撮影されたもの
であろう。



内田正練直筆の家訓（内田正昭氏寄贈）

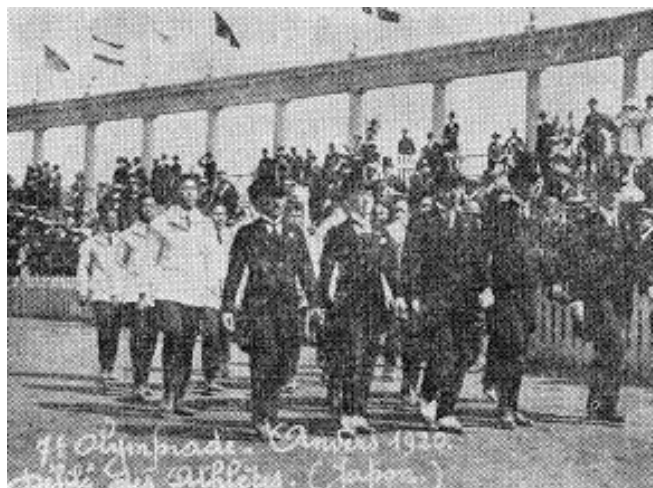


オリンピック代表決定を伝える東京朝日新聞
(1920年04月26日)

アントワープ大会での100m自由形の記録

1位	カハナモク (USA)	1分01秒4
2位	ケロハ (USA)	1分02秒2
3位	ハリス (USA)	1分03秒0

斎藤兼吉と内田正練も参加したが、記録は残っていない。Herman De Wael による Full Olympians のホームページによると内田正練は予選で6位、斎藤兼吉は予選7位である。



日本代表の入場行進、左から4人目が内田正練(水連四十年史)

400mの記録

1位	ロス (USA)	5分26秒8
2位	ランガー (USA)	5分29秒0
3位	バーノット (CAN)	5分29秒8

日本選手の予選記録は水連四十年史によると

斎藤兼吉 6分16秒8 予選2位、準決勝途中棄権
内田正練 6分40秒0 予選3位、予選敗退

内田らは外国人選手が長距離をクロールで泳ぎ通すのを見てクロールの優位を認識した。ちなみに国内予選での100mの優勝タイムが1分12秒4であるから、力の差は明白であった。いかに水府流片抜手の達人といえども、近代クロール泳法には及ばなかったのは至極当然の事であった。この時の様子は野口源三郎が東京朝日新聞に次のように報告している。「マラソンの行われた同じ日に水泳の百米突の第一予選が行われ、斎藤、内田の両選手が参加したのです。私は都合で直接見る事が出来なかったのでしたから、両選手の附添に行つて呉れた永井教授の報告に依つて御報せ致します。内田選手は惜しいところで遅れ、斎藤選手は決勝点際で敗れたそうです。此の両君が弱いのではない。相手が皆強過ぎたのだと永井教授は報告の後で付け足しました。私は此処までお報らせのペンを走らせました。けれ共再参繰返す事ながら何うも楽にペンが進みません。又之を読まれる同胞諸君にも恐らく読む張り合いが無い事と思われます。然しゲームは勝と負との両面があり、而して勝は陽性であり、負は陰性である。失敗は永

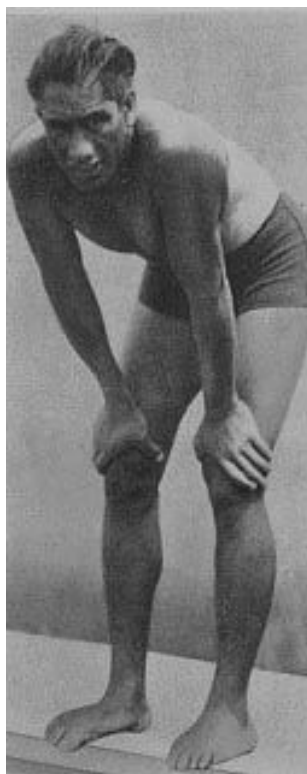
久に失敗として終わるのではなく是が将来に来る勝利を一段と速に來たらしむる有効な刺激剤となることを確信しつつ、今ペンを走らせて居るのです。読者諸君も最も少し辛抱を持たれんことを切望致します(大正9年10月18日東京朝日新聞)。」

内田正練と一緒にオリンピックに参加した斎藤兼吉は新潟県、佐渡、相川出身。東京高等師範を卒業後、大正10年3月から大正11年4月まで天王寺中学の教官をしていた(天王寺高校同窓会資料)。斎藤兼吉とクロールの関係を示す高石勝男の手記が残されている。天王寺中学の教諭であったと記されているのでオリンピックから帰国の翌年、大正10年のことであろう。「斎藤先生はアントワープのオリンピックには得意の片拔手で参加され奮斗のかいなく泳法の差で敗れて帰国されたのであった。その時に外国選手の泳ぐクロールの偉力を十分に体験されたはずである。にも関わらず帰った後もクロールへ転向する考えは全然もたれなかったようであった。ことほどさように斎藤先生の片拔手は立派であった。それがクロールに関心を持つことを邪魔だてしたものと推察する。当時クロールを泳いでいたわれわれは身体が小さかったせいでもあろうが、競技会で斎藤先生に負けた経験がある。斎藤先生が片拔手を固執されたお気持ちもわかるというものだ」(泳ぎと歩き、12p)。大正15年発行の京田武男著「最近の水泳術」のクロールストロークの解説の後に、斎藤兼吉氏、鵜飼弥三郎氏等は上手である(p120)と記されている様に、斎藤兼吉はすでに短い距離をクロールで泳いでいたが、水連四十年史に引用されている斎藤兼吉の泳法紹介文によると「斎藤兼吉君が50ヤード、100ヤードで無敵の偉名をとどろかせているその唯一の武器は、近年流行のバタ足小拔手と称する泳法である。ヒザの関節、足首の関節に十分の柔らかみを持たせ、こまかいバタ足を使い、手は、手のひらを下にして水面と垂直に大きくかき上げる。この泳法は、昔から無いわけではなく、また欧州のいわゆるクロールに類似している....」とあり、バタ足小拔手であるとするものもある。ただし上記の高石勝男の手記にあるように正統なクロールを泳いでい



アントワープオリンピック水泳競技の様子(水連四十年史) 写真の下に "100meter", "Herald", "Ross", "Kahanamoku", "Harris"などの名前が読めるので100m自由形決勝のスタートの写真と思われる。

た高石の眼には斎藤の泳ぎはクロールとは映らなかったのであろう。



デューク・カハナモクはハワイ出身の水泳選手で、1912年スウェーデン スtockホルム大会(金メダル1個、銀メダル1個); 1920年ベルギー アントワープ大会(金メダル2個); 1924年パリ大会(銀メダル1個); 1932年ロサンゼルス大会(銅メダル1個)と息の長い選手であった。当時はハワイ勢が世界の競泳会をリードしており、カハナモクはその中心選手であった。彼のクロールはキャピールのクロールに由来するものではなく、ハワイの現地人に伝わる水泳術に基づくものと言われている(水泳日本, p14)。

第3章 内田正練のクロール普及活動

オリンピック報告会

オリンピックから帰ってきた内田正練はこの後自ら競技会に出る事はなく、専らクロールの普及活動に精力を注ぐ事になるが、当時の水泳界を取り巻く環境は問題も抱えていた。鷺田成男の手記が当時の様子と内田正練の考え方を記しているので引用する。「当時の水泳界の総元締めは体協内の水泳部会であった。部長は今村次吉、幹部は本田存(ありや)、後藤武保など日本泳法の大家で日本泳法の伝習を指導方針としていた。体協水泳部会はオリンピック大会や極東大会の予選会を開き、全国大会を開くなどして水泳界を牛耳っていたが、競技会の運営や審判などが独善的で、選手の抗議を取り合わないような横暴さを感じさせるできごとも続いたので、選手の中に体協に不満を抱くものができはじめていた。大正9年のアントワープ・オリンピックから帰った内田正練なども体協指導を不満とする急先鋒で、万朝報記者だった私なども、その口から『プールの静水で行われるオリンピックでは、古来の日本泳法ではダメだ。早くプールをつくりたい。日本泳法にこだわらず、クロールを練習する方針をとるべきだ。そうしなければ外国選手と対等にレースすることはできない。こうした改革を体協は取り上げまい。体協首脳を一掃するか、別の水泳連盟をつくるべきだ』というような話を聞いたものだ。当時体協主流でなく大会によく計時を受け持っていた梅沢親光、飯田光太郎、石本己四雄なども同意見を持っていた。そのころYMCAや茨木中ではクロール研究が盛んにはじまっていた。私はそうした情勢を見て、ある日、本田存を訪ね、体協の方針改革を迫ってみた。すると『君の考えはまちがっている。日本泳法はすぐれている。これに熟達すればオリンピックに優勝するものは必ず出る。いまさら外国の泳ぎを研究する要はない。体協幹部の人事刷新などもってのほか』としかられた(後略)。(水連四十年史)。このように日本の水泳界全てが諸手をあげてクロールを受け入れ

た訳ではなかったが、拔手で日本の王者であった内田正練は海外事情を自分の目で確かめた後は日本泳法に固執することなく、クロール普及の先頭に立った。これこそ初めてのオリンピック代表選手の使命でもあったし、またそれは「失敗を永久に失敗としては終わらせない」という野口源三郎の願いを具現するものでもあった。

大正9年11月6日、英国に残留した斉藤兼吉らをのぞく内田正練ら10名のオリンピック代表選手団は神戸港に到着した。その夜、大阪朝日新聞において歓迎会が行われ競技会の報告を行った後、選手たちは夜行列車で東京にむかい、翌7日午後東京の学士会館で催された体育協会主催の歓迎会に出席した。内田選手は欧米の水の冷たい事や跳台の高い事(10m)から練習が思うように出来なかった事などを列挙したあと「彼らの水泳はレースの水泳であるに反し我が泳法は泳ぐ為の水泳で世界の何国にも劣らない」と述べ、更に勝んが為にはターニングを研究し、今後我国の大会は春の初めか、秋の末の寒い頃にやって貰いたいと希望した(大正9年11月8日東京朝日新聞)。茨木中学の杉本伝教諭も学生を伴い大阪での報告を聞きに行った。その話の中で(1)水泳場の水温が大変低く18度前後であり西洋の人は平気で練習していたが、斎藤や内田は寒くて震えて水中の練習が思わしく出来なかった事。(2)自由形の優勝者は長短距離にかかわらずすべてクロール泳法であった事。以上2点が忘れる事の出来ない耳の底に残った点であったと述べている(水泳と歩き)。この話から、杉本伝はクロールで長距離を泳ぎ通そうとしていた自分たちの方針は間違っていなかったと確信を持ったのである。また冷たい水に慣れるため桜の花と共に泳ぎだし、紅葉の散るまで泳ぎ通した。内田正練にとってアントワープの運河の水が冷たかったのは印象が深かった様で、後年長女の恵美子さんにもこの話をしたそうである。

一緒に参加した斉藤兼吉の帰国が遅れたので、近代クロール普及の第一歩は内田正練によって行われた。帰国後内田は中学校に出向いて講演を行い、水泳講習会を催すなど精力的に近代クロールの普及活動を行った。当時札幌一中の学生であった三島康七(後に北大水泳部入部)は、オリンピックから帰国した内田の指導はクロール一点張りであったと述べている(北大水泳部誌 1980, p5)。同じく札幌一中の学生であった大塩 糺(後に北大水泳部入部)によると、札幌一中の中学生たちは帰国した内田に中島公園に召集され、岸辺に学生服を脱ぎ捨てた内田はザンブと公園の池に飛び込み向こう岸まで泳ぎ切ってみせたという。豪快な水しぶきとともにそのスピード感到に圧倒されて大塩達は啞然と見ていたが、さらにこれがクロールという世界的な競泳方法であると聞かされて2度びっくりした(北大水泳部誌、創部60周年記念号)。内田はこの泳法をうつぶせのバタ足の拔手と説明していた。このようにしてクロール泳法はヨーロッパへ紹介されてから18年後に北海道に移入されたのである。そして中島公園の池こそが日本近代クロール発祥の地なのである(昭和55年度北大水泳部誌、p4)。



昭和初期の中島公園池(北大水泳部15周年記念誌)

大正10年(1921)3月21日 定山溪高山温泉において講習会を開き、前からコーチしていた札幌一中生その他有志に新しい泳法を公開した

大正10年(1921)4月 廣田戸七郎、宮川知平、高

橋北雄が内田正練と相談し、予科水泳部を設立。

北海道大学水泳部は正式には1921年に設立されたが、内田正練や助手の加藤文治郎らによる実際の活動はその2年前から行われていた。それは最新の技術を中学生に普及啓蒙し、北海道の水泳レベルを当時の全国トップ水準にまで引き上げたきわめて活発な活動であった。大正14(1925)年、第2回全国中等学校大会で名門の茨木中をはじめ、和歌山中、浜松商、濱一中などをしのいで、函館中学が優勝したのはまさに内田正練による啓蒙活動の結果である。

拔手泳者からクロール泳者へ

当時のクロール普及の様子を知る記述が宮下利三の手記(北大水泳部15周年記念誌, p177)にある。それによると大正10年(1921)の第1回全道中等学校水上競技大会の長距離400mと1500メートルを泳いだ選手はすべてサイドストロークであった。短距離の50mに優勝した助川氏は50mはクロールで泳いだ、100mはトラジオンストロークであった。大正11年(1922)の第2回大会には1500m優勝者の福田氏(北中)のみがクロールで、あとはみなサイドストロークであった。このように大正



定山溪に於ける水泳講習会風景(大正10年3月21日)
写真中央白い帽子が内田正練氏(北大水泳部15周年記念誌)

10年、11年ではクロール、トラジオン、サイドストロークと種々な泳ぎが見られた。ところが大正12年(1923)の第3回には優勝者の山崎氏(函商)、2位の宮下利三など入賞者はすべてクロールになった。クロールで長距離を泳ぎ通せとの考えは着実に北海道にも根付いていった。宮下はすでに1922年に

は1500mをクロールで完泳できるようになっていたが、優勝者の福田にしる宮下にしる練習中のサイドストロークの方が良い記録が出ていたので、今だクロールの実力を確信できないでいた。それが1923年になって入賞者がすべてクロールになりやっと確信できるようになったとある。

クロールストロークと早抜き手の優劣については「日本体育叢書12, 水泳」p236に比較研究が為されている。原稿は大正12年に書かれたものであり、当時のクロールに対する理解の内容を知る事が出来るので以下引用する。

「競泳用として、何れが秀れて居るかという事については事実クロールをやった人が勝った為論議の余地はないようであるが、何故にクロールが秀れて居るかという事を判然とすることはクロールをして其特長を發揮せしめる所以になるだろうと思うから科学的に考えて見たいと思う。大体速力について言えば其速力を生ずる原動力と此運動に対する抵抗の大小とに依る。一般に煽りの泳ぎは伸はあるが進行に緩急があり殆ど停止の時期があるので左程早くなくとも連続的に行くクロールには及ばないのだとせられて居る。併し此は表面の観察によるので根本的に前述の二項について考うべきものであろう。

先ず原動力の方から見ると手と足と共に使う点は同じだが足だけの方からいえば煽りの方がバタ足よりも数等秀れて居る。併し一煽りに左右一回づつか抜けないのでクロール程調子を早くする事が出来ない。併し同じ調子であるとすれば早抜き手の方が原動力の点からいえば勝っていると見なければならぬ。

次に抵抗の方から見るとクロールは体型の変化がなく、体の角度も水面と殆ど平行であるから泳法の中で最も抵抗の少い形になっている。早抜き手は同じく平体ではあるが全く水面と平行になって煽れば受足が水から出るので煽る時は幾分下体が沈まなければならない。従って抵抗は大部分早抜き手の方が大きくなる。そこで早抜き手では煽るときは殆ど横体となって煽りなるべく下体を沈まないようにし且つ、伸の間にも下体が沈むから之を防ぐためバタ足を入れる

がよいのである。

次に早抜手の今一つの大きな欠点は煽るため足を曲げる時に抵抗を受けることである。この時の抵抗は足の運動が進行の方向と正反対であるため単に体の傾きに依て受ける抵抗より余程大なるものである。而も此抵抗は速力が大なるほど大なるものだから短距離の急泳では非常に大きなものとなって早抜き手は到底クロールに及ばない事になる。長距離にも此抵抗はあるがクロールの方も足を大きく開いてバタ足をやるためいくらの相違もないだろうと思う。従って長距離用としては早抜き手とクロールと何れが良いか判断はつかぬ。要は練習によって永く続くか否かによると思う。」

このように非常に科学的な分析でクロール泳法の長所を理解しているのであるが、長距離に関しては優劣つけがたいと判断するのは既成概念の呪縛から抜け出せていないのであろう。

大正10年(1921)5月4, 5日 極東大会の予選会を三笠園で行った。

斎藤兼吉、内田正練、平野豊、則末芳三など煽り足のベテランは姿を消し、顔ぶれは一新した(水連四十年史, p25)。しかしクロールの習熟は十分ではなく、オリンピック予選の斎藤や内田の記録には及ばなかった。

50m		
1位	小野田一雄(拓大)	32秒2
2位	和久山修二(YM)	
3位	小高賀茂(YM)	
100m		
1位	小高賀茂(YM)	1分16秒2
2位	和田次衛(横商出)	
3位	小野田一雄(拓大)	
400m		
1位	小野田一雄(拓大)	6分39秒2
2位	羽根田梅太郎(YM)	
3位	入谷唯一郎(茨木)	
1600m		
1位	羽根田梅太郎(YM)	28分36秒8
2位	松沢一鶴(YM)	
3位	今村栄三	
100m背泳		
1位	持永義崇(長崎高商)	1分38秒4
2位	入谷唯一郎(茨木)	
3位	斎藤剣次(愛知游研)	
200m平泳		
1位	石田信雄(茨木)	3分29秒4

- 2位 岡村幸吉(錦城青年会)
3位 小野寺幸一(和歌山武徳)

大正10年(1921)5月30日 第5回極東大会

上海にて開催された。優勝は松沢一鶴と羽根田梅太郎の2名だけで1点差でフィリピンに敗れた(記録は水連四十年史)。

50ヤード

- 1位 アブレオ(比) 28秒2
2位 オンシンガン(比)
3位 佐野勝太郎

100ヤード

- 1位 アブレオ(比) 1分04秒0
2位 オンシンガン(比)
3位 小野田一雄

440ヤード

- 1位 松沢一鶴 6分16秒8
2位 小野田一雄
3位 今村栄二

1マイル

- 1位 羽根田梅太郎 27分26秒0
2位 松沢一鶴
3位 今村栄二

100ヤード背泳

- 1位 フェルナンデス 1分19秒8
2位 持永義崇
3位 入谷唯一郎

200ヤード平泳

- 1位 フェルナンデス(比) 3分19秒0
2位 ビスコンテ(比)
3位 小野田幸一

220ヤードリレー

- 1位 フィリピン 1分52秒0
2位 日本
3位 インターナショナルチーム

大正10年(1921)6月 北大水泳部第一回塩谷合宿

北大水泳部は部員を獲得する事を主眼に、塩谷の濱中漁場において1学期の試験終了後合宿し水泳講習会を開くこととし、学内に掲示して参加者を募集した。またコーチとして極東大会で1マイルに優勝した羽根田梅太郎氏(YMCA)を招聘した。期間は6月末の1週間で、参加人数は約25名であった。午前、午後2回の練習としクロール、バック、ブレスト、横泳ぎ、拔手などを講習した。宮下利三(札幌一中)によると「当時長距離を泳ぐのに「サイド(ストローク)」か「クロール」かが問題になって居た。そして北大に羽根田氏が来て長距離をクロールで泳ぐというのを見に行った。短距離はトラジオンクロール

ルで泳いだので、恰度継足という風な泳ぎで50mを35秒ぐらいかかったものだ(北大水泳部15周年記念誌 p261)」とあり、バタ足のクロールでは無かった。羽根田梅太郎は鶴岡中学出身で、内田正練が庄内中学で水泳師範をしていた時に指導した選手である(高昌平手記)。

大正10年(1921)8月5日 水泳講習会開催

小樽新聞社では水泳講習会を8月5日から15日間銭函海岸で開催した。講師は内田正練氏、加藤文治郎氏ほか北大水泳部員がつとめた。講習会の様子を報じた8月5日の小樽新聞の記事が15周年記念誌に載っている。「既報の如く本邦水泳界の権威内田正練氏を師範に北大加藤文治郎、高橋北雄両氏外数名を助手とせる本社主催北大予科水泳部後援の第1回水泳講習会は愈々午前十時講習会場たる銭函海岸に於いて発会式を挙行し引き続き来たる19日まで



北大水泳部塩谷合宿(大正10年)
(北大水泳部15周年記念誌)

毎日午前十時より午後四時まで講習をおこない内田師範以下各助手が熱心に指導の任に当たるはずであるが講習会終了の翌二十日は閉会式を兼ねた盛大なる水上競技を行う予定である。講習会場はすでに報道せる如く銭函海水浴場林家前を借り受け水面四十間四方を画し二カ所の飛び込み台を有する水面上20尺の櫓を立て三隻の警護船を以て万一を期すべく陸岸には講習会本部、脱衣場、休憩所等の設備を施して遺漏なからん事を期して居るが本社の此挙を賛せられた地元銭函村有志は特に協賛会を設けられ開

会までの諸準備は勿論会期中も色々と周旋の労を執って呉れる事となったのは本社の深く感謝する所である。.....中略.....。因みに講習会員は必ずしも多しとせぬが(約百名)9月上旬に札幌に於いて開催する全道中等学校優勝旗競泳大会を控えている事として樽中、樽商、北商、北中、一中、札師、札工その他の各校からは何れも水泳部を代表すべき一流選手を送り、来るべき大会に備えんとしその他会員中に各種の猛者集まり居れば斯界の発達に貢献さんとする講習の目的は充分に達せられる事と思われる。...後略...」。このように単に講習会と言ってもその規模はかなり大がかりなものであった。

大正10年(1921)9月3～4日 第1回全道中等学校水泳大会

北大水泳部主催小樽新聞社後援の全道中等学校水泳大会を中島公園池で行った。これは北海道に於いて競泳を普及するためには中等学校に於いてこれを盛んにすれば優秀なる選手も出、やがては北大水泳部も堅実な歩みをつづけるだろうとの大きな希望を持って計画したものである。資金は小樽新聞社の後援によりまかなった。大会会長に青葉萬六教授、審判主任と出発係長を内田正練が務めた。宮下利三によると大正10年当時内田正練をはじめ北大水泳部の学生や一緒に練習していた中学生たちもクロールによって短距離を練習していて、内田正練に指導されていた助川氏は50mを普通のクロールで泳ぎ優勝したが、100mはトラジオンで泳いだ。400m、1500mはすべてサイドストロークであった。内田正練はオープンの飛び込みを披露した。(北大水泳部15周年記念誌, p176-178)

50m自由形	1位	助川(一中)	35秒8
	2位	内藤(函商)	36秒0
100m自由形	1位	水沼(札師)	1分29秒0
	2位	助川(一中)	1分29秒2
200m自由形	1位	内藤(函商)	3分21秒0
	2位	吹田(樽中)	3分22秒0
400m自由形	1位	青山(一中)	7分22秒8
	2位	宮下(一中)	7分36秒2
800m自由形	1位	寺尾	17分40秒6
	2位	福田	17分45秒4
1500m自由形	1位	青山(一中)	29分13秒6
	2位	吹田(樽中)	29分18秒3

200m平泳	1位	後藤(樽中)	3分38秒0
	2位	名雲(樽中)	3分39秒0

200mリレー	1位	一中(助川、宮下、平城、西尾)	2分39秒0
	2位	函商	2分49秒2
100m平(オープン)	山極	1分58秒0	
総得点	1位	一中	20点

	2位	樽中	11点
	3位	函商	8点
	4位	札師	3点
	5位	北中、札工、二中	各1点

この大会の開催に至る経緯について大会会長青葉萬六予科教授は次の様に述べている。「北海道に水泳を興すには中等学校からやらねばならぬということになって、当時柔剣道がやっていたので水泳も始めようと言う事になった。そこで水泳書を買って来ると大会をするにはかなりの費用がかかる事がわかった。場所は中島の池で、25mのプールを作るとすると、スタート臺やターニング臺が要る。内田は200円もあればと云うのでタイムスに話した所、後援はするが費用は15円位しか出さぬと云う。後で考えると内田は安い事を云っていたが、実際はもっと高い。そこで小樽新聞社が引き受けてくれたが、その時困った事に池のボート屋から、大会のために休む一日のボートでの収入80円というものをせと云うんだ。まあその方は金を払って使用权をもらったがネ。所で水着のことでサ。警察では公園で裸体になることは許可しないと云うのサ。水着を着れば良いと云う様な話だけど一中の生徒らは水着を着て泳いだ事がないので泳げないと云う。警察の方でも脱衣室をこしらえてやれば黙許すると言う。今年は署長の方で計らうから来年から駄目だと云うことでやっとできた(15周年記念誌 p262)」。水泳講習会を開き、中学生たちに互いに競う場を提供する事によって北海道の水泳は確実に進歩した。北大水泳部主催の全道中等学校水泳大会は大正13年まで続けられたが、第4回大会からは北海道中等学校競技連盟が主催する事となり北大水泳部の手を離れる事となった。第2回から昭和11年の第13回大会までの記録は北大水泳部15周年記念誌にまとめられている。

大正10年(1921)8月29日 第1回全国競泳大会
を濱名湾游泳協会主催で、浜名湖弁天島100米塩
水プールでおこなった。この全国大会をつうじて浜
名湾游泳協会のレベルは更に向上し、この後野田一
雄、磯部勝治、野寄金次郎、片山兼吉、宮崎康二な
どの著名選手を生んだ。

50m		
1位	板倉 巖 (茨木)	29秒2
2位	斎藤剣次 (愛知)	31秒2
3位	入谷唯一郎 (茨木)	31秒4
100m		
1位	入谷唯一郎 (茨木)	1分09秒0
2位	舟木茂治 (濱名湾)	1分14秒8
3位	浅田安雄 (愛知)	1分15秒4

1位	小野田一雄 (濱名湾)	25分13秒4
2位	松上龍太郎 (茨木)	25分48秒0
3位	小野田一夫 (濱名湾)	28分51秒0
100m背泳		
1位	石田恒雄 (茨木)	1分26秒6
2位	入谷唯一郎 (茨木)	1分31秒8
3位	斎藤剣次 (愛知)	1分39秒0
200m平泳		
1位	石田恒雄 (茨木)	3分11秒6
2位	板倉 巖 (茨木)	3分22秒2
3位	長谷川精 (愛知)	3分52秒0
200m継泳		
1位	茨木中学(石田、入谷、坂倉、松上)	2分11秒2
2位	濱名湾(清水、舟木、白都、小野田)	2分14秒0
3位	愛知游泳(斎藤、武藤、森川、浅田)	2分27秒8



大正12年9月中島公園プールで行われた第3回全道中学校水泳競技大会の様子。長距離もすべてクロールで泳ぎ通すようになっていた。一番手前が宮下利三(一中)、3人目が三島康七(一中)。(北大水泳部15周年記念誌)

200m		
1位	板倉 巖 (茨木)	2分50秒8
2位	天野眞治 (濱名湾)	2分58秒4
3位	舟木茂治 (濱名湾)	2分58秒6
400m		
1位	小野田一雄 (濱名湾)	5分54秒6
2位	浅田安雄 (愛知)	6分00秒0
3位	天野眞治 (濱名湾)	6分14秒8
800m		
1位	小野寺一雄 (濱名湾)	12分25秒6
2位	松上龍太郎 (茨木)	12分50秒0
3位	天野眞治 (濱名湾)	13分52秒2
1600m		

800m継泳		
1位	茨木中学(石田、入谷、板倉、松上)	11分36秒0
2位	濱名湾(小野田一雄、白都、天野、山内)	11分58秒0
3位	西遠游泳(松本、高村、林、田辺)	タイム不明
得点	1, 茨木中学	30点
	2, 濱名湾游泳協会	21点
	3, 愛知遊泳	8点
	4, 西遠遊泳	1点

浜松北高水泳部百年史(p131)

この大会には北大水泳部も参加していた。北大水泳部15周年記念誌(p263)の対談には次のように記されている。

廣田：その頃僕など無理して**濱名湖の大会**まで出掛けた。当時小野田一夫(注：一雄の間違いであろう)なる人が短距離では御大でね。紹介状を貰って行きました。高石氏なども中学生で来て一緒に泳いだけれど、その様に中央に出たいと云う望みが強かったよ。この時が濱名湾游泳協会の第一回大会で、北大水泳部という名義で出場したよ。予科の時だったが.....。

当時厄介になったのが白都氏(注：白都定義、大正3年立教大学入学)という浜松一中の人で、田畑政次氏などはまだ帝大生だった。種目は50と百米で50を30秒5分の4位で泳いでいた。第一予選で5等位に入って高石の次だった。

宮下：当時高石は駄目でした。石田、家谷(注：入谷の間違いであろう)が居ましたよ。百は六秒位で行ったのでせう

廣田：いや7、8秒かかって伸びちゃった。当時の一等が50を29秒5分の1位でしたとせう。

第4章 日本水泳界の躍進

大学対抗水上競技大会始まる

大正10年(1921)：第一回インカレ開催

万朝報新聞社が主催して大学対抗の水上競技大会の開催に乗り出し、9月10日、11日の2日に亘って、生麦の三笠園池にて開催された。第1回学生水上大会の参加校は立教・慶大・明大・早大・一高・東京薬専・拓大・東京高師・東大農学部・長崎高商・東京高工の11校であった(水連四十年史)。

大正12年(1923)5月21～25日 第6回極東大会開催

大阪築港大運動場に於ける第六回極東選手権競技大会第二日(二十二日)の水泳第一日は同運動場内タンク(プール)で午前十時から華々しく舉行されたが、最も日本軍が接戦を演ずると想はれてゐた此の競技が最初から殆ど日本側の独舞台ともいふべきで、盡く新記録を出し、民軍には一人の入選選者もなく、比軍亦全く振はず、第二日以後の成績に如何なる変化が生ずるにしても日本の勝利は疑ひのないものと見てもいい位である(号外大正史 p, 336)。第6回極東大会での自由形では在来の抜手はすべて姿を消してクロール泳者が全部覇権を握っている(水泳日本, p23)とあるようにクロール泳法を体得した日本選手団は大勝をあげた。記録は次のとおり。

50ヤード	1位	小野田一雄	26秒0
	2位	入谷唯一郎	
	3位	鈴木伝明	
	4位	インガ(比)	
100ヤード	1位	小野田一雄	58秒4
	2位	入谷唯一郎	
	3位	鈴木伝明	
220ヤード	1位	藤本秀松	3分12秒6
	2位	石田恒信	
	3位	杉田忠治	
	4位	板倉 巖	
440ヤード	1位	高石勝男	5分39秒6
	2位	小野田一雄	
	3位	松沢一鶴	
	4位	三倉 博	
1マイル	1位	高石勝男	24分50秒2
100ヤード	1位	斎藤巍洋	1分12秒0
背泳	2位	上田 治	
	3位	萩 清	

	4位	野塚義則	
220ヤード	1位	藤本秀松	3分12秒6
平泳	2位	石田恒信	
	3位	杉田忠治	
200ヤード	1位	日本(鈴木伝明、小野田一雄、	
継泳		高石勝男、入谷唯一郎)	1分41秒6
(水泳日本 p24、水泳指導 p35、号外大正史, p336)			

大正12年(1923)8月5日第14回濱名湾連合水泳大会

模範泳法(御前游)の出場者に内田正練(25歳)の名前がある(浜松北高水泳部百年史, p138)。これが水泳の大会で内田正練が泳いだ事が確認できる最後の記録である。彼はオリンピックで外国人選手と戦うにはクロール泳法を練習しなければならないと説いて



第6回極東大会参加選手と杉本監督 (泳ぎと歩き)
左より杉本伝、高石勝男、鈴木伝明、小野田一雄、
入谷唯一郎、松沢一鶴

その普及に努めたが、帰国後の報告会でも述べていたように日本泳法を否定したわけではなく模範演技を披露していた。

大正12年(1923)8月26日 第8回全国大会開催(芝公園プール)

50m	1位	小野田一雄(濱名湾)	28秒4
100m	1位	高石勝男(茨木中)	1分05秒2
200m	1位	宮畑虎彦(高等師範)	2分32秒4
400m	1位	宮畑虎彦(高等師範)	5分37秒4
800m	1位	野田一雄(濱名湾)	11分50秒2
1500m			

1 0 0 m 背泳	1 位 児玉博(東京 YMCA)	2 2 分 5 6 秒 8
2 0 0 m 平泳	1 位 上田 治(茨木中)	1 分 1 8 秒 0
2 0 0 m 継泳	1 位 石田恒信(茨木中)	3 分 1 0 秒 2
8 0 0 m 継泳	1 位 茨木(入谷、高石、上田、木村)	1 分 5 7 秒 6
	1 位 浜名(磯部、野田、大場、小野田)	1 0 分 5 3 秒 0

煽り足の拔手からバタ足のクロールに転向した泳者は呼吸するとフォームが崩れ、大きな煽り足が入ってしまうという欠点があったが、入谷唯一郎や高石勝男(茨木中)につづいて児玉博(YMCA)、野田一雄(浜名湾)など最初からクロールで育った泳者が出てきた。かれらは時間をかけないスムーズな呼吸と連続的でリズムカルなバタ足を持った新しいクロールを身につけていた(水連四十年史)。

オリンピック大会で入賞

大正 1 3 年(1924) 第八回オリンピック(パリ大会)

1 0 0 m	1 位 ワイズミューラー	5 9 秒 0
	2 位 デュークカハナモク	1 分 0 1 秒 4
	3 位 サムカハナモク	1 分 0 1 秒 8
	4 位 アルネボルグ	1 分 0 2 秒 0
	5 位 高石勝男	1 分 0 3 秒 0
4 0 0 m	1 位 ワイズミューラー	5 分 0 4 秒 2
	2 位 アルネボルグ	5 分 0 5 秒 6
	3 位 チャールトン	5 分 0 6 秒 6
1 5 0 0 m	1 位 チャールトン	2 0 分 0 6 秒 6
	2 位 アルネボルグ	2 0 分 4 1 秒 4
	5 位 高石勝男	2 2 分 1 0 秒 4
1 0 0 m 背泳	1 位 ケロハ	1 分 1 3 秒 2
	6 位 斎藤巍洋	1 分 1 9 秒 6
2 0 0 m 平泳	1 位 スケルトン	2 分 5 6 秒 6
	2 位 コンベ	2 分 5 9 秒 0
8 0 0 m 継泳	1 位 アメリカ	9 分 3 6 秒 2
	2 位 オーストラリア	1 0 分 0 2 秒 2
	3 位 スウェーデン	1 0 分 0 6 秒 8
	4 位 日本(宮畑、野田、小野田、高石)	1 0 分 1 5 秒 2

(記録は早稲田大学水泳部八十年史, p56、水泳日本, p25、朝日新聞 100 年の記事に見るスポーツ人物史, p96)

パリオリンピックには高石、斎藤、野田、小野田、

宮畑、石田の 6 名が参加した。一行は 4 1 日かけて日本郵船の「香取丸」でマルセイユにむかった。甲板にキャンバスで 7 m のプールをつくって、選手はそこでバタ足やターニングの練習を繰り返して体調を整えた(水の上を走れ p130)。自由形では高石が 2 種目に 5 位入賞、8 0 0 m リレーで 4 位入賞をするなど日本のクロールはアントワープオリンピックに初参加からわずか 4 年で世界と対等に戦えるレベルに達した。1 0 0 m 自由形はワイズミューラーが 1 分を切って優勝した。

大正 1 3 年(1924) 8 月 2 2、2 3 日 第 1 回全国中等学校水泳大会

全国学連の主催で東京調布の金子プールで行われた。高石勝男や入谷唯一郎らは卒業してメンバーは入れ替わったが、茨木中が優勝した(水連四十年史)。

5 0 m	1 位 杉原 茂(茨中)	2 9 秒 8
	2 位 三倉 博(早実)	
	3 位 大場 保治(浜一中)	
1 0 0 m	1 位 北村 博繁(新潟中)	1 分 1 0 秒 6
	2 位 柳井 巖(大連商)、	
	3 位 杉原 茂(茨中)	
2 0 0 m	1 位 磯部勝治(浜一中)	2 分 3 6 秒 8
	2 位 鈴木伸夫(立教中)	
	3 位 片岡 忠(鹿児島一中)	
4 0 0 m	1 位 児玉 博(日大中)	5 分 3 6 秒 4
	2 位 磯部勝治(浜一中)	
	3 位 近藤 恒(浜一中)	
8 0 0 m	1 位 児玉 博(日大中)	1 1 分 4 7 秒 0
	2 位 鈴木伸夫(立教中)	
	3 位 近藤 恒(浜一中)	
1 0 0 m 背	1 位 木村象雷(同志社中)	1 分 2 2 秒 2
	2 位 市村勝治(大連商)、	
	3 位 深渡瀬勇根(鹿児島二師)	
2 0 0 m 平泳	1 位 斎藤吉之助(茨木中)	3 分 2 4 秒 6
	2 位 山本盛光(茨木中)	
	3 位 高谷幸承(茨木中)	
4 0 0 m 継泳	1 位 茨木中(吉岡、松上、山崎、杉原)	4 分 5 1 秒 2
飛び込み	1 位 横山琢磨(茨木中)	
	2 位 清水 治(五中)	
	3 位 山崎郁男(茨木中)	

対抗得点	茨木中	39.5
	濱一中	18
	大連商	11

大正14年(1925)8月22～23日 第2回全国中等学校大会で函館中学優勝

東京芝プールで行われた(水連四十年史)。

50m		
1位	柳井 巖 (大連商)	28秒8
2位	伊藤正郎 (函中)	
3位	外川 正 (横商工)	
100m		
1位	小野田一雄 (浜商)	1分07秒0
2位	柳井 巖 (大連商)	
3位	佐藤正郎 (函中)	
200m		
1位	野田一雄 (浜商)	2分30秒4
2位	福田博達 (北海中)	
3位	神 義次 (函中)	
3位	米山 弘 (水戸中)	
400m		
1位	野寄金次郎 (浜商)	5分37秒0
2位	福田博達 (北海中)	
3位	鈴木伸夫 (立大中)	
800m		
1位	米山 弘 (水戸中)	11分56秒0
2位	河野 健 (茨木中)	
3位	近藤 恒 (浜一中)	
1000m背		
1位	大槻 繁 (和中)	記録不明
2位	寺尾敏夫 (日本商)	
3位	西垣鉦太郎 (大連商)	
2000m平		
1位	時任 巖 (函中)	3分12秒4
2位	有本佑一 (和中)	
3位	伊藤房吉 (浜商)	
4000m継		
1位	茨木 (吉田、安田、荒木、金森)	4分51秒0
	2位 函中	
	3位 和中	

得点 函中37点、茨木中27.5、大連商23、和中23、浜商22、北海中15

第2回大会に於ける函館中学の優勝について水連四十年史は次の様に評価している。「**北海道の水泳は浜名出身の内田正練の北大入学がきっかけで大きく躍進した。**純然たる道産子には宮下利三(札一中、北大)、松浦武雄(北海中、立大)、根上博(余市中、立大)などが出ている。函館では函館中、函館商などが五稜郭の堀で練習していた。函商は森豊(明大)、函中は小高賀茂(早大)の指導を受け、対抗意識を燃やし励んでいた。この年の函中は平泳ぎの極東選手時任巖

に加え、短距離に神義次、長距離に寺田亨太郎(後に極東選手となった)を揃え得点37点をあげ2位の茨木中を10点近く引き離し優勝を勝ち取った。名門の茨木中をはじめ、和歌山中、浜松商、濱一中(内田正練の出身校)などをしのいで、函館中が優勝したのは異彩であった(p53)。」その原因は、第6回極東大会(大正12年)の自由形では従来の拔手はすべて姿を消してクロール泳者が全部覇権を握っている(水泳日本 p23)という動きに遅れることなく、北海道に於いても近代クロールへの切り替えが進み、しかも内田正練直伝の最も新しいクロール泳法を会得したため、まさに内田正練の指導の賜であった。

大正15年(1926)8月18日 大阪毎日新聞社主催第3回全国海上10マイル競泳大会 拔手で泳いだ第1回と第2回の優勝タイムがそれぞれ6時間02分と5時間10分であるのに対し、入谷唯一郎(茨木中)はクロールで泳ぎ切り4時間24分で優勝した(泳ぎと歩き、p119)。記録の伸びにこの20年間の進歩が良く表れている。2位以下の記録は見つからないが、この大会に参加し4位になった北大水泳部の中松四郎の手記を巻末に引用した(参考資料4)。予選を突破した20名の泳者がそれぞれに幟を立てた船を従えて遠泳をする壮大なレースであった。

日本におけるクロール普及過程

日本に於けるクロールの普及は以下の高石の記述によってまとめられるであろう。

「日本にクロールの輸入されたのは大正2、3年頃と見られ、初めてこれを試みた人に鵜飼弥三郎氏が挙げられよう。しかしながら精確な意味のクロールが多くの人によって研究され始めたのはそれより5、6年後の大正7、8年頃で、より全般的に見るならば内田、斎藤両選手の国際オリンピック参加を持ってクロールの何物であるかが日本人に理解された最初であると言える。それまではクロールという新泳法があるそうだが、足をバタバタさせる泳ぎだそうだがぐらいの程度の理解しかなかったが、内田、斎藤両氏が国際オリンピックに参加してカハナモク等の

代表的なクロールを目のあたりに見るに及んで、今後の水泳界はこの泳ぎを中心としなければならぬとの実感を深めて帰朝し、専ら新泳法の扶植に努めたのであった」(水泳日本,p21)。

高石による日本に於けるクロール導入プロセスを詳細に解説すると、つぎの3つの流れに区分できる。
すなわち

(1) 見よう見まねの時代 (大正2、3年頃)

横浜体育研究会の鵜飼弥三郎や萩原誠一郎らが外国人の泳ぐクロールを見てまねた時代。関西では中田留吉が神戸において外国人からクロール泳法を習ったとされている。最初の20～30mを頭を突っ込んだまま息をせずにクロールで泳ぎ、後は拔手などで泳ぐか、あるいは最後の20～30mをクロールでラストスパートした。新しい泳ぎとして興味は持たれたが、「息のきれ目が泳ぎのきれ目(水の上を走れ,p127)」と言われるように長距離に用いる事も出来ず脅威とは認識されなかった。

(2) 研究の時代 (大正7～9年頃)

茨木中学の杉本教諭がダニエルの原著を読んで研究生徒に指導した結果、入谷唯一郎や高石勝男などが育った。東京のYMCA室内プールにおいてもクロール泳法の研究が続けられていた。入谷唯一郎は一掻き毎に首を横に振って呼吸をし、長距離もクロールで泳ぎ通せる様になったが、現在の様な連続的なバタ足ではなく大きな煽り足を伴っていた。大正9年のオリンピック予選で拔手泳者の斎藤兼吉や内田正練が代表選手に選ばれたという事はクロール泳法の将来性については杉本など一部の先進的指導者以外には未だ理解されていなかったということである。

(3) 新しいクロール発展の時代 (大正10年以降)

アントワープオリンピックに出場した斎藤兼吉と内田正練はカハナモクラの洗練されたクロールに接しその威力に驚いた。外国人と競泳する

にはクロール泳法をマスターしなければならないと確信した内田正練はその泳ぎを修得して帰国し、帰国報告会や道内各地での講演会、講習会、競技会などで新技術の啓蒙に努めた。大正12年には極東大会に於いても全道中学校選手権においても拔手やサイドストロークは完全に姿を消し、自由形は全てクロール泳法になった。

これら3つの流れは独立に存在したのではなく、それぞれ前の時代に築かれた土台の上に立って次々と花を開かせていったと考えられる。すなわちダニエルの著作のみでクロールをどのように泳ぐかをイメージするのは大変困難であったと思われるが、鵜



北大時代の内田正練 (親戚の子供たちと一緒に)

飼たちのクロールを見る事によって杉本伝も具体的な動きを理解でき、生徒を指導する事が出来たのであろう。また内田が持ち帰ったクロール泳法および「長距離もクロールで泳ぎ通せ」という考え方も茨木中に入谷唯一郎らによってすでに試みられていて、戸田の大会で実証されていたので内田正練の普及活動も大変効率よく進んだ。その結果短期間の内に全国に広がり、3年後には北海道の中学生大会ま

でも全てがクロール泳法に置き換わるという大革命を行う事が出来たのである。これが4年後の1924年パリオリンピックに於ける自由形100mと1500mの高石勝男や100m背泳の斎藤巍洋の入賞、800mリレー4位などの成績へと結びついたのである。



中学時代の内田正練（右側）

第5章 内田正練その後

大正10年(1921)に内田正練はひさ夫人と結婚した。
大正11年(1922) 内田正練は北海道大学農学部を卒業し、北海道拓殖銀行に勤務した。大正14年(1925) 故郷に帰り浜名湖養魚場へ勤め、さらに昭和2年(1927) 神戸の日米種苗(株)に勤務した。



結婚式の記念写真(北海道神宮、左端が母親)

昭和7年(1932) 海外における大農園経営の夢を抱いて、アルゼンチンに渡った。当時アルゼンチンは移民を認めていなかったが、兄の内田千尋氏がアルゼンチンの日本大使館に勤務していたので特別に許可された。長男練太郎氏は学業の関係で日本に残り、夫婦と子供2人をつれての移住であった。アルゼンチンでは野菜園を経営し現地の人を多数雇う大きな農場に発展して農場経営は成功したが、バッタの大群におそわれて野菜が全滅し、大農場の一労働者として苦闘する事もあった。此を期に野菜の栽培から牧草を栽培しヨーロッパに輸出する様に転換した。アルゼンチンに於いても農場内の川で水泳を教えていた。スペイン語は話せない状態で現地へ赴いたのであるが、農場経営でアルゼンチンの人にスペイン語で指示するまでになった。

昭和16年(1941)6月 日本の母親が亡くなったのを期に農園を売却して帰国。昭和16年、塩水港製

糖会社の技師として東南アジアに赴いた。その後大東亜戦争が勃発。イギリスからの独立を目指すアウンサン將軍等のビルマ人活動家を支援していた南機関の鈴木敬司陸軍大佐と呼応してビルマ義勇軍の將軍となった。遠藤順子著ビルマ独立に命をかけた男たち(PHP 研究所)のなかに、「このサルウィン河の渡河作戦では、南機関に加わった元塩水港製糖社員にしてオリンピック背泳の選手であった内田正練氏が南方軍や南機関の仲間が見ている前で鮮やかな泳法で忽ち対岸まで遊び渡ったのが忘れられぬと奥田重元氏は話してくださいました」との記述があります。背泳とあるのは間違いにしても、内田の泳力はビルマでも発揮されていたのがわかります。昭和17年(1942)3月のラングーン陥落においては独立義



夫人ひささんと長女恵美子さんといっしょに
(アルゼンチンにて昭和12年)

勇軍として入城行進した。日本はビルマに軍政を実施、独立を主張していた鈴木敬司大佐は日本への帰還命令が出て南機関は解散となり、内田正練も陸軍の命令で帰国させられる事となった。

昭和19年(1944)4月、彼の活躍を評価した日本海軍からニューギニアの司政官に任ぜられた。しかし、戦争末期でポートモレスビーからの転進敗走で、栄

養失調でばたばたと倒れる中、皆から慕われた彼は食糧を薦められたが将来ある若い人にあげてくれ、と固辞して受けず、昭和20年2月14日ニューギニア島サルミの名もない山中で遂に倒れた。時に47歳であった。従五位勲五等を遺贈された(浜松北高百年記念人物誌)。



アルゼンチンへの出発時の記念写真(神戸港の船上にて、昭和7年1月)

右から5番目が内田正練、一人おいてひさ夫人。ひさ夫人の前が長女恵美子さん。



日本帰国後家族との記念写真 昭和16年
前列左端内田正練、左から4番目夫人ひささん、後列左端次男正昭さん、左から4番目長女恵美子さん

参 考 資 料

参考資料 1

明治 31 年(1898) 8 月 13 日の競泳大会を伝える新聞記事

「一昨日午後四時より横浜西波止場沖に於て日本橋区浜町河岸の水府流太田派水術教場の生徒と横浜アメチュア、ローイング倶楽部員とが行ひし競泳勝負は取敢ず前号欄外を以て報道せしが今其詳細を再報せんに、当日は朝来微風動かず残炎燬くが如くなりしにも拘わらず内外人の競泳は従来曾て其例なき事とて西波止場には見物人黒山を築きつ。山青く潮白きボート、ハウスに参集せる来賓には帝国大学を始め府下の諸官私立学校生徒、京浜居留の外人及び新聞記者等あり。神奈川県知事、同参事官、警部長及び同各警察署長等は別に水上署の蒸気船にて同じく此現場の盛事を参観せり。来賓はすでにハウスの楼上楼下に填咽せり。いづれも満懐の清風に飽きつつ競技の演ぜられるべき時の今や来るとウオッチ取出だしては待兼ねたり。斯して午後三時四十分双方の選手十二名はハウスの階下に整列して記念の撮影を了り、それより舩船に乗り手沖合に設けある外人水泳場のデッキに移れり。来賓も亦順次同上付近の大小船へ運ばれぬ。蓋し競技の行はるべき場所は水泳場のデッキと其正面なる木造橋梁様（長さ数十間あり）との間にして其距離約そ百十ヤードあり。されば百ヤード以上の競泳は此間を往復するなり。審判官は即ち倶楽部の会長セレンバー氏にして水泳場の周囲には内外人を満載したる大小幾十艘の船繋がれ、彼笑ひ此罵り或はラムネを飲み或は煙を喫し甚だ喧猥を極めたり。やがて午後四時を報ずるとともに第一番競泳（百ヤード）の選手たる黒々白々の四名は従容としてデッキの正面なる木橋を距ること十ヤードのヤーク船上に整列せり。彼等は今実に列国環視の間に立つ者なり。其態度爾く静肅なりといへども其心臓は眼下の浪よりも高く搏つなり。四名の選手とは誰ぞ言わく、熊本県土族東京物理学校の校外生溝口幹知（二十六）、曰く英国人ゴツダード（二十）、曰く米国人ウキード（十八）、曰く東京府

平民城北尋常中学の生徒近藤要次郎（十七）なり。突如として準備の声聞えぬ。数千の見物人は今や孰れも鳴を鎮めて視線を悉く選手に注げり。ゴー、オンの声は間もなく響きぬ。同時に四名は筋斗打て水中に跳り込めり。鵜よりも勦き雪よりも白き四個の蛙児は両拔手或は片拔手の秘計を尽し激浪駭浪を蹴開きつついづれも勢を鼓してデッキに突進するなり。溝口、ゴツダード、ウキード、近藤ヘービーだヘービーだ楚乎しろ、負けるな油断するな等の狂呼は拍手の音に和して鳴わたれり但見れば溝口とゴツダードは相並びて前に進みウキードと近藤とは稍これに後れたり。内外の見物人は愈々烈しく呼はり騒ぎぬ。正に是れ二竜珠を奪ひ両虎肉を争いつつあり。兩人は決勝点に近づきぬ。而してゴツダードは溝口に後るゝること数尺なり。是に於て乎ゴツダードは焦心り溝口の名はますます高く絶叫せられぬ。彼は自己に後ること数尺なるゴツダードを顧るや否や満身の勇を四肢に集めて両拔手に波をきりつつ実に一分十二秒にして目標のデッキに着きぬ。喝采の声は乾坤を撼かせり。即ち先着の名誉は溝口に帰し第二着はゴツダード、第三着は近藤、第四着はウキードなりき。（朝日新聞 100 年にみるスポーツ人物誌、p. 39）」

参考資料 2

明治 32 年(1899) 年 8 月 12 日の第 2 回目の競技会の様子

「本会は水府流太田派遊泳教場員と、横浜アメチュア・ローイング倶楽部との競泳にして前年も横浜に於いて举行せし事ありしが、本年は東京に於いて催ふこととなり、恰も内地雑居の際なれば、一層世人の注目を惹き居たり。去月十二日は炎暑烈しく、且つ烈風砂塵を飛ばせしにも拘わらず、午后三時より隅田川上流に於いて開かれたり。今其景況及勝敗を記さんに、当日来客は日本銀行艇庫前に集まり、其他の見物人は堤上に群がり堵を築くばかり、立錫の地もなく、殆ど花見時の賑ひなりき。艇庫の前面

の河流には百ヤードの距離を有する二個の筏を置き十数隻の舟を連ねたり。斯して定め時間に至りければ第一番に百ヤード競泳は開始せられぬ。泳手は拍手喝采の中に迎えられ鐸の響きと共に筏の上に現れたり。太田方にては近藤、田中両氏、倶楽部方にてはドラモンド、ウイードの両氏にて、外人は幹長大全身白きこと雪のごとく、本邦人は短小にして全身黒き事鉄の如く、四人は順次艇上に整列し一二三の号令と共に水煙高く水中に跳入り白泡たてて押し来る波を分けつつ泳ぎだししは眼覚ましとも勇しかりし。やがて五十碼に進みし頃、近藤氏は得意の片手抜きを以て外人に先だこつと数尺、遂に決勝点に入り、優かに勝利を占め、第一着、近藤要次郎、第二着、ウイード、第三着、田中金次郎、第四着、ドラモンドにて邦人の勝となり。次に三百ヤード競泳を行ひ、第一着、原田昌吉、第二着、ゴッダード、第三着、ヘーワード、第四着、島山精と定まり。原田氏得意の諸手抜にて敵を抜くこと四五間、何の苦もなく勝利を占め是れ邦人の勝となりぬ。

次は八百八十ヤード競泳を行ひしがこれぞ当日の呼び物なる長距離の競泳にて、百十ヤードの競泳場を四回まで往復するものなれば泳手の困難思いやられぬ。泳法は溝口、清田、アーウィン、プールの四勇士にして、我こそ勝利の名誉を得んと必死となりて泳ぎ行きし。溝口氏は太田派随一の剛の者、清田氏も十六歳の若武者なるが、亦た一騎当千の強者なり。溝口氏は得意の二段展を以て清田氏と併行し、敵を抜くこと常に一間ばかり、其突進する度毎に頭上の水激して一尺も上がり、勇氣甚だ凜然たりし。然るに茲に惜しむべき出来事起りたり。昨年横浜における競泳の際、最優等を占めたる溝口幹樹氏も先頃より脚気病に悩み居りしを押し出泳したることとて、身体冷ゆると等しく下肢の筋肉に痙攣を起こし身体の働き自由ならず、半途に於いて水中に沈まんとせしかば、救助の者数名、直に飛び込みて救はんとせしに、幹樹氏これを排して自ら陸に上がり直に医師の治療を受けたり。又プール氏も百ヤードほど後れたれば中止し、残れる兩人の競泳とはなりぬ。清田氏は常に横展と抜手にて敵に先だつこと数

尺、並居る見物人は皆手に汗を握り勝敗如何にと控えたりしに、清田氏の漸く進んで決勝点に入らんとする一刹那、敵は長大なる足にて水を蹴り、終に僅か半身の差にて第一着、アーウィン、第2着、清田政人と決せしなり。されど溝口氏に健康なりせば容易く勝利を得たらむものをと惜しまざる者はなかりし。(日本水泳史, p119)

参考資料3

大正3年(1914)8月10日 第1回水上競技大会の様子

「大日本体育協会主催の第一回水上大会は、既報のごとく十日午前十時より府下大森海岸瓦斯(ガス)会社構内の海岸にて行われたるが、この会は将来我が国水泳競技界の標準競技たらしめんとする抱負あるだけに、遠くは京都より参列せる者もあり、参加者は百名を越えずといえども、いずれも各流各水泳場を代表せる選手揃いにて、また見物もその道に興味を有つ者多く、なかなかの盛会なりき。競技は百、二百、四百、八百米突の四種のみなるが、レコードを慎重に作るため一回五人以内にて幾回にも分けて行い、その中にて時間の短き者より順次採用せしかば、散会せるは午後六時なりき。

この日の競技に注目すべきは、横浜体育研究会の選手なる鵜飼弥三郎、萩原誠一郎の両氏がすべての競技に必ず優者たりし一事にて、下に記せるレコードのごとく百米突は鵜飼氏一等、萩原氏二等、二百米突は萩原氏一等、四百米突は萩原氏二等、四百米突団体競泳には両氏と他の二人を加えたる横浜体育研究会の勝つ所となり、八百米突また鵜飼氏の一等となりたる事にして、両氏は共に明治四十四年夏、我が時事新報社が芝浦に於いて大水泳会を開催せる時の六人の優勝者の内の一人にして、すなわち鵜飼氏は我が社の二百ヤード競泳に二分三十二秒の記録を作り、また萩原氏は同じく二分五十九秒を以て第三等の好成績を挙げたるなり。殊に鵜飼氏の百米突レコードのごときは、発砲係の不始末の犠牲となりて、いったん正しく出発したる競泳を途中にて中止され、充分に疲労を回復する遑なく直ちに再試し

たるにも係わらず、一分〇五秒五分の一と云うオリンピックレコード（一分〇二秒五分の二にて淡水）に近きレコードを挙げ得たるは特筆大書すべき事にして、氏は我が社がかつて紙上に紹介せるクロールストローク泳法を研究し、この日の百米突競泳にはいっそう新式なる濠太利（オーストラリアン）クロールストローク法を用いて見事なる勝利を得たるなり。（後略）」（大正ニュース事典第Ⅰ巻、p353）

参考資料 4

大正 9 年(1920) 5 月 1 4 日オリンピックへ出発

国際選手出発すー揃いの紺背広も新しく、十二分の決意をみせて

昨日の朝九時十分東京駅頭からワーッと云う歓声が起こった。これぞ国際オリンピックに出場する本邦代表選手一行の栄ある鹿島立ちに、見送満余の人々から投げ出された勇ましい送辞であった。三越で新調した揃いの紺背広にニコニコの選手連は口急の電車で横浜に着、上州屋前で再び勢揃いして栈橋に向い水上署前で夫々原籍地年齢を聞かれた。処が斎藤内田の両選手が見えない。体育協会の今村委員は焦気味で両選手を探しに人を派したが即刻に見付からない。然しそれも無事に済んだ。いよいよ選手は乗船した。本社初め各方面から贈られた花籠が盛んに持ち込まれる。栈橋は数千の見送り人でスツカリ埋められて了つた。上からもしたからも赤、白、青、桃のロールペーパー幾條も幾條も投げられた。下からは校歌、応援歌、万歳の大合唱が幾度も幾度も湧く。之に一々応対する選手は別れの言葉に船室を顧みる暇もない。甲板の欄干に伸び上がった選手の顔は初夏の日に照らされて赤く頬照る。「御機嫌よう」

「しっかり頼む」と幾度となく別れを惜しむ間に正午いよいよ出帆の合図の警鐘が鳴り出した。最後の万歳と万雷の如き拍手を浴び乍ら選手を乗せたコレア丸は静かに動き出した（東京朝日新聞、大正 9 年 5 月 1 5 日）。

参考資料 5

国際競技へ 船中手記 コリア丸にて 金栗四三

（上）

東京より横浜迄

選手が決定して僅か十二、三日の間に未知の外国に行く青年学生等嬉しいやら内心不安やらで学校には出るけれどもなかなか落着いて学課が手に付かないのも無理はない。九年前であった自分が高師の学生時代ストックホルム大会に出場した時の追憶が浮かんでくる。然も着飾って行く洋行でもないで僅かの間に準備が出来た。十四日の朝九時東京駅は可成りの人出是皆国家の中枢となって活動すべき都下専門学校の学生の選手見送りである。東京駅の歴史にあって是れ位有意義の人出はなかったろう。二台、三台と電車が出たが、皆選手と見送り人を鈴なりに積んで、十三人の選手を乗せた車は全く力強い学生連の万歳で押し出されたのだ。車は一時間馳せて横浜に着いた。一行を乗せて米国まで送るコレア丸は黒煙を吐いて出帆を待っている。

コレア丸乗船

乗船前人員を検査したが出発間際になってまた一人二人の紛失者が出来る。血眼になって探して見ると彼方此方で一分間でもと親友に掴まって話をして居る。やっとの事で揃った選手は米国までの起居を託す船室に行って見る。再び甲板に現れれば見下ろす栈橋は全く見送りの紳士淑女学生に埋められ、フレーフレーや万歳で耳が聾せんばかり。選手の顔には喜びの口と必勝の固き決心で全く興奮し切って居る。いよいよ出帆の汽笛が鳴った。又一しきり万歳が叫ばれる。「嗚呼我は行くなり、愛する日本よさらば」

太平洋上の日

太平洋の大なるは何人も知って居る。大きい丈浪も高いだろうと案じていたが□□□□の尖端を去る頃から浪が騒ぎ出し一万二千噸のコレア丸もそろそろ揺れだした。夏北条の海水浴に行く時の船の揺れ方とはチト異つている。東京湾を抜け出していよいよ外洋へ差し蒐ると浪は次第に高くなる。中甲板では未だ馴れぬ足がヒヨロヒヨロするが、幸いに船酔いするまでもない。「船室」は...我等十三名の船室は

三等室を改造した二等室改造とは名ばかり。船首の船底一種異様な臭気が胸をつく。壁にある三つの窓もしぶきが吹き込むと云うので塞がれ直接に風のはいる穴もない。其の上船がピッチをする時は前後の上下動は免れない。ところ處で、ドブーと海水に深く這入ったかと思うと又フイと浮き上がるその上下動の心地悪さ。皆船室を飛び出しては甲板にでて了ふ。「食堂」は... 二等の食堂は後部の下甲板だ。動揺も少いからと云ふので其処へ逃げ込んで寝転んで居るとボーイが来て叱られる。止むを得ず前部船室に帰れば又復臭気がプンと迫って胸が一時に塞がって来る。靴を脱いだ丈着のみ着のままベッドに引き込み腹を押さえて我慢するのが毎日だ。サアそれから上も下も隣も三軒目も船酔に襲われて了つた。此の船室で三日頑張ったのは小生と大浦君丈。他は皆出たり這入ったり大抵は食堂を居所の如く考えて了つた。コレア丸はおろか他の船でも食堂変じて寢室となった例は又とあるまい。幸いなことには二等の食堂に来るのはバンドー隊(比律実)佛国士官三名丈であつたから食堂を変じて寢室にしても不平を言う人もなくそれに船長さんが黙許して呉れたのでいよいよ我々は食堂を寢室兼用に拝借することが大威張りとなつて了つた。お陰で船酔いも余程よくなつたからそろそろ選手はパクリ出した。而も俄仕込の食堂礼儀で却々堂々たるもの紳士的態度になつて来た。(東京朝日新聞、大正9年6月14日) 旧漢字、かな使い等一部修正。□は判読不明文字を示す。

(下)

練習開始

甲板を走り回る事はとても許されないと東京を立つ時聞いて居たが小生は「そんな馬鹿な事が」と思い乍らも黙って聞いて来た。いよいよ選手の身体も平常の通りとなつたから辰野監督が船長に中甲板を駆ける事を交渉した。すると船長口では「それは許し難い」とは云うものの内心「ヤレヤレ」と勧める口吻に一同大喜び。どうせ外人等も競技が好きなんだから故障も出まいと協議一決早速十八日から毎日午後一時と二時の間に練習する事にした。長距離坂元、

□□大浦、茂木、八島、三浦、佐野、蓮見と小生は毎日約五十分宛走った。五種十種の野口、斎藤、益田の面々も船で出来るランニングや鉄弾投射をやる。加賀、山岡の短距離ランナーも駆ける。**内田、斎藤の河童さんも船で拵えてもらった四間(7.2m)四方のキャンパスのタンクでジャブジャブやり出す。**十三名のユニフォーム姿が追々には船客一同の無聊を慰むる好適物となつて非常な歓迎を受ける様になった。その上レデー達が盛んにカメラを向けてくるので皆々大悦び。練習が済んで遙かに洋上を眺むれば□すんだ海水の果てもなく見渡され小止もなく打ちよする大浪のウネリの間を縫うて船かと見紛う大鯨の出没する壮快さ。茫然として天上天下唯我独尊..... 全く好い気になつて了う。

淡水湯

我々は日常毎日湯に入つて居たのに船中では三日に一遍しか入れない。それも土那人の湯番が眼を丸くして見張つて居る。船の中では真水が非常に大切なので朝起きて顔を洗つても何だか目が覚めた様な気がしない。殊に練習後の汗を拭くにも一滴の水も無駄には出来ないものでこれでは体が腐りはせぬかと思われる位、湯の恋しさは又一倍と増す。然し之れも海上生活に馴れれば無精も左程ではなくなるんだから習慣は恐ろしい。

船中の余興

十日あまりの航海、「今度は波が馬鹿に高い。選手方の中で何か罪を犯した人が居ませんか」と一船員は云う。「イヤ、それは貴方方の内ですヨ」と選手の一人がやり返す。すると誰やらが「此の船には米国の百万長者ヴァンドリップが乗つて居るからだヨ、金持ちは罪だから」と船乗りの迷信が夕食後の談笑となる程皆馴れてきた。一日上甲板で水夫の相撲大会が始まつた。そこへ斎藤、**内田**、益田の三選手が飛入りして水夫連をコロコロとやっつける。銃剣道の試合をやれば辰野監督、野口、斎藤の面々が得意の腕を振うので外人連は大悦び。終わったあとで一外人が辰野君に柔道の説明を聞いて「アレは魔法だ」

と驚いた。それからと云うものは辰野君は外人から大変畏敬される様になった。

ハワイ着

船は段々東南に進むにつれて気温は次第に高くなり明日(二十三日)はハワイに着くという頃は八十度と云う蒸し暑さになって来たが、幸いの雨で幾らか和らげられた。ハワイに着いたらすぐ上陸して練習もしよう。日本量の上に寝転んで太平楽を並べたいなんて子供の様に嬉しがるのも無理はない。日本の土地を離れて十日振りに土を踏むんだものなア。....故国の運動家諸君..お陰で船にも馴れ一同大元気。十分自重して居りますから出発の際の諸君から受けた「シツカリ」の声は耳に残って決して忘れません。お機嫌よう(東京朝日新聞、大正9年6月15日)。旧漢字、かな使い等一部修正。□は判読不明文字を示す。

参考資料6

大正15年(1926)8月18日 大阪毎日新聞社主催第3回全国海上10マイル競泳大会に参加し4位になった北大水泳部の中松四郎の手記。

(前略) これは前にも書いた様に大毎が十年に一度堺濱寺方面の海上で行う大競泳大会で私の出場した十年前の第二回の時百人余りの者が一斉に跳込む予選、それにパスした二十名の勇者がそれぞれ幟を立てた船を従え輪贏を決する壮観、又賞品として与えられた錦の巾着入りの金子等子供心の小生にも強い印象を与えたものであった。勿論この時の泳法はほとんど全部が片拔手であったと記憶している。この第三回がまた郷土の海で行われると知るや、錦の巾着を夢見て出場に決心、夏休みで帰郷するや母校堺中水泳部に混じり共に練習、主として1哩を日に二回泳ぎ、五哩の遠泳試験の時について行ったのが唯一の全コース練習であった。いよいよ当日、体格検査をすませた一同百余名は数泳の船より一斉に跳込み堺濱寺間三里の予選コースを遮二無二泳いだ。幸い三着でゴールインし上陸すると新聞社の活動写真

班に収まった。そして得意だった。現在水泳界に君臨する斎藤巍洋君(注:茨木中から立教大学。1924年パリオリンピックの1000背泳で6位入賞)もそれが全力だったかは別としてとにかく予選に置いては飛沫をあびせたのだから愉快だった。翌日パスした二十名により、いよいよ十哩コースによって雌雄が決せられた。当日は無風快晴の絶好の大会日和で各付き添いの船を一艘づつ従え勇躍スタートを切ったのである。最初一哩ほどはかなり猛烈に競り合ったが、後は殆ど同じ調子で濱寺の沖を過ぎ七哩ばかりの天津の鼻にさしかかった。そこまでは予選の時と同じ三番目を泳ぎ、而も二番目とは十米程であった。コースはここで折かえして再び濱寺へ向かうのであるが小生の体のコンディションは良いし、疲労もさして感じないのでつい欲を出し前の選手を追い抜いてやろうと野心を出し心持ちピッチをあげた。これがそもそも大失敗。それまで七哩程殆ど機械的に同調子で動いていた肩が急に調子が変わられたので、忽ち疲労を感じ、又その疲労の度合いも何れも八哩を泳いだ後の事、とても並大抵のものでなくその中数町も離していた後の選手も刻々近づき気が気ではない。頑張ろうとすればする程疲れて遂に抜かれた。もう泳ぐ気力も無くなり、幾度か付き添いの船に上がる事を願ったが、その度に叱られ励まされ文字通り夢心地で泳いだというより流れにまかせて浮いていた。かくして流れ込みの戦法功を奏し辛くも四着で決勝点についた時の嬉しさは全く何ものにもたとえようがなかった。泳法は同コースをクロールで頑張り時間は三時間余であったと記憶している。その時の一着は高石君の同窓大阪茨木中学卒業の入谷君であった。この競泳にて自分の経験したことはかかる長距離に於いては初めのうちにスピードを出して他を抜き後はそのままおしきるか、或いはラストベビーを出す戦法ならば最後の一哩になってからでないと駄目だと言う事で、もし参考にでもなればと付記する次第であるが(北大水泳部15周年誌 p173)。

参考資料 7

今回の企画展示は各報道機関で以下のように紹介された

平成17年4月06日 北海道新聞朝刊

平成17年4月16日 北海道新聞 Oh さっぽろ

平成17年5月01日 STVテレビ どさんこサンデーで紹介された

平成17年5月22日 STVラジオ 「北海道百年物語」で取り上げられた

平成20年3月29日 TBS系列Bsi 「こんな凄い奴がいた」で紹介された

ほっかいどう百年物語 第六集 STVラジオ編、中西出版 に採録されました



内田 正練

うちだ まさよし

1898~1945

北海道大学在学中の大正9年、ヘルギー・アントワープオリンピックに日本人初の水泳選手として参加した内田正練。自他ともに認める日本最強の泳ぎ手だった内田正練は自由形に出場、活躍を期待されましたが、日本固有の古式泳法では世界の主流であるクロール泳法に敵が立たず、惨敗します。帰国後はクロール泳法の普及に全力を注ぎ、いまでも続く水泳王国・日本の大きな礎となりました。

大正9年8月14日、第7回オリンピックの開会式がベルギー・アントワープで行われました。参加したのは、29カ国、2千607人の選手たち。その中に、日本中の期待を一身に背負った水泳選手、22歳の内田正練がいたのです。

271

には、自分の財産をすぐに投げ出す人間でした。どこかで困っている人の話を聞くと、食べ物や新聞したばかりの服を持っていき、「体を壊したら元も子もないぞ」と言っでは置いてくるのです。それでいて、自分の毎日来ている服は、「まだ充分着れる」と、つぎはぎだらけの粗末なものばかりでした。

「人生、損得ではない。いかに人のために尽くせるか、それが立派な男の生きざまだ」

父から受け継いだ精神を、最後まで貫いた朝日昇は昭和32年、73歳で天寿を全うしました。彼の努力で、浦幌の人々からは毎日明るい笑顔が絶えず、十勝も馬産王国と豆王国の名を築き上げました。浦幌出身朝日昇の名は永遠に十勝の歴史に刻み込まれていくでしょう。



勲章伝達式の朝日夫妻

270

文 献

新式水泳術、斎藤六衛、東亜堂、大正 2 年

東京朝日新聞縮刷版、大正 9 年

日本体育叢書第 1 2 編 水泳、佐藤三郎、目黒書店、
大正 1 3 年

競泳法、CL ダニエルズ著 帝大水泳部訳、コズモス
書院、大正 1 5 年

最近の水泳術、京田武男、三田書房、大正 1 5 年
水泳日本、高石勝男、木村象雷、改造社、昭和 9 年
北海道大学水泳部創立 1 5 周年記念誌、北海道帝国
大学文武会水泳部、昭和 1 2 年

日本水泳史、石川芳雄、昭和 3 5 年

泳ぎと歩き、杉本 伝、大阪府立茨木高等学校久慈
会発行、昭和 4 0 年

水泳指導、日本水泳連盟普及委員会編、文教書院、
昭和 4 2 年

水連四十年史、日本水泳連盟、昭和 4 4 年

スポーツの科学的指導Ⅳ水泳、古橋広之進他著 不
味堂出版、1 9 7 3 年

五十年の歩み、札幌水泳協会、昭和 5 9 年

日本水泳史料集成 文献編(復刻版)、日本水泳連盟、
昭和 5 9 年

万有大百科事典、小学館

朝日新聞 1 0 0 年の記事に見るスポーツ人物史、朝
日新聞社、昭和 5 4 年

早稲田大学水泳部八十年史、稲泳会、平成 3 年
浜松北高「百周年記念人物誌」、浜松北高同窓会編、
平成 6 年

号外大正史、羽島知之編、大空社、1 9 9 7 年
浜松北高校水泳部百年史、浜松北高校水泳部史編集
委員会、平成 1 2 年

水の上を走れ、高野義夫、日本図書センター、
2 0 0 1 年

高島平手記

ビルマ独立に命をかけた男たち、遠藤順子、PHP 研
究所

北海道大学北方資料室、明治大正期北海道写真目

関西おもしろ文化考、Yomiuri On-Line KANSAI、
([http://osaka.yomiuri.co.jp/omoshiro/010725.
htm](http://osaka.yomiuri.co.jp/omoshiro/010725.htm))

スポーツ文化史資料情報館、小田切毅一、
([http://www.eonet.ne.jp /~otagiri/](http://www.eonet.ne.jp/~otagiri/))

なつかしい日本の汽船、長澤文雄、
(<http://homepage3.nifty.com/jpnships/>)

Full Olympians、Herman De Wael、
([http://users.skynet.be/hermandw/olymp/intro
.html](http://users.skynet.be/hermandw/olymp/intro.html))



内田正練氏 (昭和 16 年頃)

謝 辞

浜松北高同窓会事務局および磐田郵便局第2集配営業課加藤氏にはデータ収集において大変お世話になりました。さいべりあ丸の情報には長澤文雄氏にお世話になりました。内田練太郎氏、立野恵美子氏からは貴重な写真を提供していただき、お話を聞かせて頂きました。日本水泳連盟、浜松北高等学校水泳団、茨木高等学校久敬会、静岡新聞社、北海道大学北方資料室各所蔵の写真を使用させて頂きました。パネル展の準備と開催に際しましては北海道大学総合博物館関係者のみなさまや北海道大学水泳部員諸君の協力をいただきました。ご協力頂きましたみなさまに深く感謝致します。

北海道大学総合博物館第20回企画展示

内田正練とその時代 ―日本にクロールがもたらされた頃―

執筆者 三浦裕行 北海道大学理学研究科地球惑星科学専攻
北海道大学総合博物館資料部研究員

編集者 松枝大治 北海道大学総合博物館

発行日 平成17(2005)年3月31日

発行所 北海道大学総合博物館

〒060-0810 札幌市北区北10条西8丁目

TEL:011-706-2658 FAX:011-706-4029

<http://www.museum.hokudai.ac.jp>

e-mail:museum-jimu@museum.hokudai.ac.jp

印刷 北大印刷

